



先生ー！キツオトスで

くすぐり
は

えっちなこと

なんだよー！

フルアカくすぐり合同



もくじ

ILLUST

P3	錠前 サオリ	かむらケイ
P7	不知火 カヤ	ぽてお
P8	春原 ココナ	ちゅーさ

COMIC

P9	中務 キリノ	さなだめ
P15	伊落 マリー	ちゅーさ
P21	白石 ウタハ	みちのく
P29	小鉤 ハレ	みずこし
P35	女先生	黒蜜きなこ餅
P39	黒崎 コユキ	しゃしゃ丸
P43	陸八魔 アル	うれあっぷ

NOVEL

P48	阿慈谷 ヒフミ	メロウパン
P66	尾刃 カンナ	キノコアザラシ
P72	早瀬 ユウカ	黒羽リズ
	生塩 ノア	
	黒崎 コユキ	
P92	陸八魔 アル	イチシキ太郎
P100	月雪 ミヤコ	なな☆だま
P108	浅黄 ムツキ	しょっく
P114	ケイ	フェムト
P122	才羽 ミドリ	ソーダ

COVER ILLUSTRATION

表紙	みちのく
裏表紙	しゃしゃ丸

アリウススクワッドのリーダー
錠前サオリはテロ行為の主犯格として
トリニティに捕えられていた――

拷問か……？

痛みには
慣れている……
残念だったな……

ギ

ギ

作:かむらケイ

錠前サオリ
くすぐり拷問

ふふっいつまでその顔で
いれるか楽しみです……

始めなさい





やっ♡

やめっ♡くすぐりっ♡
あはひ♡ははひ♡ははひ♡
やめっ♡ろおっ♡♡♡

×あ×あ♡

ビクッ♡

こ♡ち♡

こ♡ち♡

っ!?♡

何を……っ!?
これ、は……っ
くっくすぐっ!

待っ…

コ♡

チ♡
コ♡
チ♡

カ♡
カ♡

ぴく♡

ぴくん♡

びく♡

こ♡ち♡
こ♡ち♡

ガ♡
ガ♡



大した事ありません
でしたね。ですが……

これで終わりだと
思っていますよね？



もあ♡

むあ……♡

錠前サオリへの
くすぐり拷問は続く

END



むあ♡



もあ……♡

ちゅ♡



くすぐり
子供の遊び
なんて
へっちゃなの！

梅花園兒

いやめっちゃ
よわよわじゃん！

はひ
はが
はは
はは
はは
はは

ウソはダメ
なんでしょ？
反省するまで
こちよこちよの

[illegible]

つちよ

つちよ

かいた人:ちゃーさ

キリがギガエロシキで
ぎゅ〜!!とかでぎゅ〜!!
みたいな泣い悲鳴あげると
すごい興奮する

作者:さなだめ

ククク:

ツメが甘いな
ヴァルキューレ

生活安全局
ふぜいが:

どこから
此処を
突き止めた?

言いません！
あなたの
している事は
犯罪です！

と…投降して
ください！！

フン…
する訳あるか
バカめ！！

ポッ！

キュ

オッ

こちょこちょ

…はっ…

あははははっ!?

はははっ!?

こちょ
こちょ

こちょ

グッ



はあはあ
はあはあ

グちょ

グちょ

グちょ

グちょ

グちょ

グちょ

グちょ

グちょ
グちょ

な...っ
なんとか
しないと...っ
たしか

グちょ

グちょ

グちょ

グちょ

グちょ

もみ
もみ
!!

もみ

チ

右ポケットに
手榴弾が...っ

グちょ

グちょ

うう……

詳細不明の廃墟……
こんなところで
皆様とはぐれて
しまうなんて……

ひびく！
な、なんですか!?
これは………標識?

服装 &
ポーズ強制



えっ
ぽん

んっ

ちゃん
すぐら廃墟
かいた人: ちゃーさ

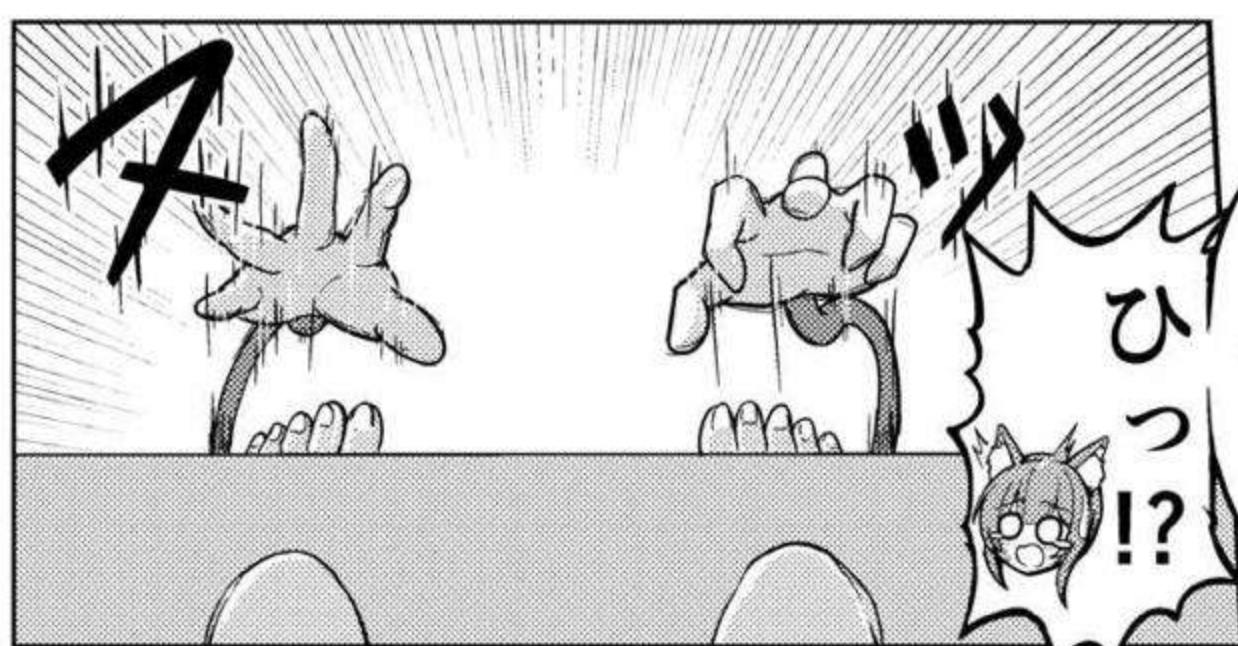
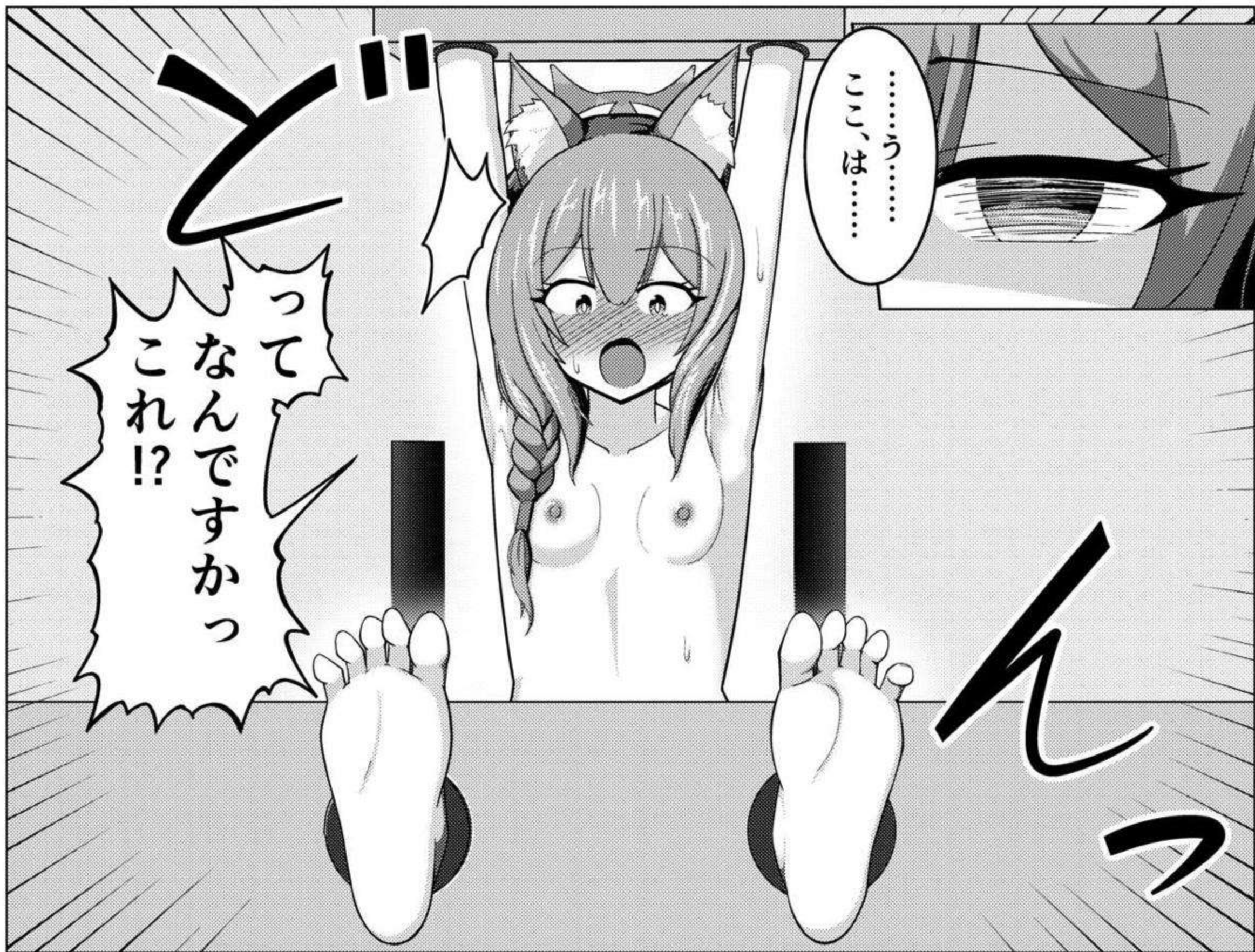




くすぐったい!!
くすぐったいれひゆ
うあははははは!!







キウオトス
某月某日
ミレニアムにて

ウタハ
先輩!!!

ちよつと
お時間

いただきます
ます!!

やあユウカ
そんなに息を荒げて
どうしたんだい?

レディウィンター
赤 冬事務局から
発明品のクレームが何通も
届いてるんです!

これ全て
ウタハ先輩
宛てですので

とっ

168454
454545
168454

明後日までに対応
お願いしますね!!

マスターの
課長

みちのく

白石ウタハ(17)
エンジニア部部長
今回の被害者

外交問題だの肅清だの
色々書いてあるんですけど
何したんですか!?

ああ……
この間提供した
洗浄マシンの件だね
貴重な被験者の意見だ
よく確認しておくよ

なんでそんな
落ち着いてるんですか

ホントに
頼みますよ!?

ああ
問題ないとも

ぎゃ...

さてと...

問題なのは

拘束モード
だったかな？

色々弄りすぎて
体も汚れてきたし
丁度いいね

管理者モード
で起動

うーん...

白石ウタハ(温泉)
(大嘘)

計器に異常がある
ようには見えない...
一度自分で試すしかないか

お風呂ロボットv1に
コード認証開始

管理者モード
承認しました

機能テストを行いたい
私を拘束して
洗浄に移ってくれ

承知しました
自動入浴補助機能を
起動します

使用者の状態...分析完了
拘束モードに切り替えます

はい

拘束完了
いたしました

拘束動作は
問題なし…でも

こんな体勢で
入力したかな…?

これは思ったより…
……恥ずかしい、かも…

ここは
直すか…

それでは
洗浄に移ります

洗浄用アーム
展開完了

要洗浄・ケア部位
データ取得を行います

全身に発汗あり、
若干の心拍数上昇を
検知しました

…くひッ!?

その他機械類の油分・煤等
外部由来の汚れも多数確認

まずは全身の
リラックスを促す
マッサージを施します

スズズズ

工程開始

こんな洗い方の
設定…
してないっ!?

ストップ、
ストップ…っ!

バクか…!?

カハハハ

付属する垢・汚れの量等から
本日は未入浴と想定します

ふひやひやっ!?

洗浄必要度…6/7
INSANA級に
該当しました

EXTRA
EXTREME
INSANE
CORE
DECISION
INSANE

あははははは！

洗淨用
ローションの
投与を開始

これは……
拙い、ね……っ

マッサージと洗淨を
双工程を並行します

あはははは

一時的に
衣類・タオル類を
没収いたします

え…な、
何を…っ!?

だ、誰も居なくて
よかった…っ

…じゃなくって!
こんな動作
知らない…っ!?

ダメだっ
考えるのに
集中できない…

刺激が、もう、
強すぎる…!

それでは次の
施術段階です

施術手順に従い
被験者の体勢を
変更します

全く抵抗も
出来ない……っ

こんな
仕様どこ……っ

はめな
はめな

被験者の
尿失禁を確認

洗浄プラン
再構成します

じいじのまめ
では……っ

テスト以前に

さらに
被験者の体勢を
再変更します

私が壊れて
しまつんじや……っ



再構成完了

がく

がく

あー

すんが

とまむ

がく

あは

ぐん

なななな

もう、何でも、いい、早く、止まって、くれ

あ、あ、ダメ、だ……

デリケートゾーンの洗浄も開始します
加えて

あや

失禁及び発汗を考慮し
脱水防止のため
水分投与も並行します



あ、あ、い、いぎ、でぎ、な……

おは

いっわねる……

いっ

いっ

がく

いっ

おは

がは

わらう、じ、う……

—被験者の
再失禁を確認

ああ…これは、
どこを、修正、
したもの、か……

衛生状態
再計算します

我々がエンジニア部の
科学力ながら、ここまでの
マシンとは……ね……

修正レポートの
内容…考えねば…

—異変に気付いた
ヒビキとコトリが助けに来たのは
夜遅くになってのことだった

洗浄開始
します

該当部位の
集中洗浄モードに
入ります

洗浄要求度
分析完了

でも……
それよりも、だ

7段階中7段階
TORMENT級に
該当しました

この…
凄まじい、地獄は…

お…まだ

続…る…

足フェチ先生はくすぐりがお好き

みずこし

へ？

先生って…
足が好きなの？

ヴェリタス
ハッカー休憩室

先生が生徒の足を
舐めていたとか

そんな噂がネットに
出回ってたり

ヒマリ部長が先生に
足を洗ってもらって

たのです
さった先生

病弱美少女ハッカーである私汚れて
しまった足 懇切に
いただいた、そ

は少々邪な気持
可憐な病弱美少

たところで 非常

がらもとても気分が

は奇妙な心地良さまでも与
ったのですいやはや先生は
が尽きないお方なのだと思

手つきがイヤらしくて
困ったけど凄く良かった
って話もしてた気がして

先生の熱い視線を感じた
気もしてたから

私が部室とかネカフェで
裸足だったりしたとき

もしかしたら
そうなのかなって
思っ

ギョッ

もい





先生もそういうコトを
して欲しかったりする
のかなって思ってたけど

足を使って色々する…みたいな
のがある事は知ってる

つまりちょっとアレなコトを
するなら今日がチャンス



マキやコタマ先輩は
補習で一日中教室にいる
って連絡があつて

副部長も外部企業の
大型メンテナンスで
泊まり込みが続いている



ちょっと予想外な
答えが返ってきた



どうやら先生は
足を「くすぐる」のが
好きなのだという

正確にはくすぐられている
女の子の声とか反応が
好きらしい

じゃあ、いいかな…ハレ

うん

お…
お手柔らかに

きゅっ

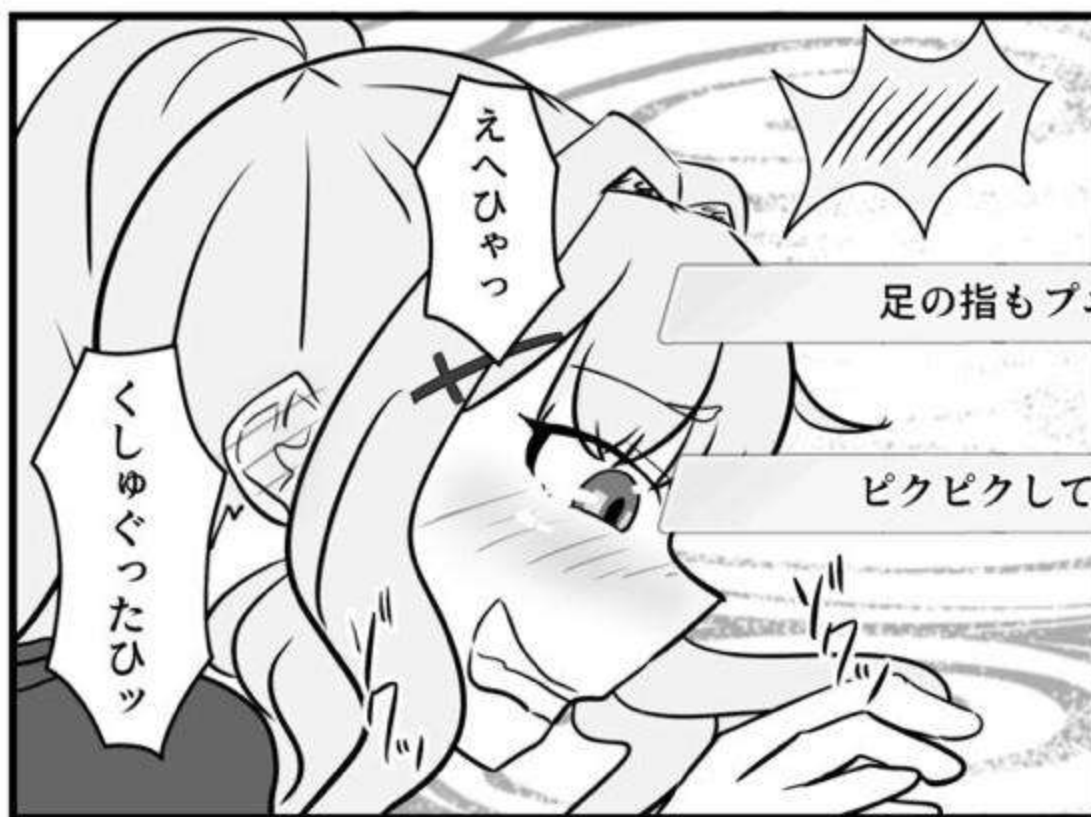
私から誘っちゃった以上
それに付き合うのが
礼儀かな…って

なかなか拗らせた
性癖かなって
思ったけど



とても可愛い足をしてるね

触っていて私も気持ち良い



足の指もプニプニしてて

ピクピクしてるのも可愛い



指と指の間にこう...

イイ反応するね、可愛い

ハレって凄く感度が良いんだね

あまり歩いてないからかな



足の裏の皮が柔らかくって気持ち良い





わっ、アテナ3号?!

ピーッ

ビュン

対象、「小鈎ハレ」の
身体情報の変化を測定し
フィードバックを実行...

フィットネスモード
ver.2.80の自動計測
オプシオンが
終了しました



ちょっとやり過ぎちゃったかな...

ハレー、大丈夫? ごめんね



● REC ()

先生の行為に対し
否定的な言葉を
発言していますが

対象は嘘を
ついていました

ちょ...

特にこちらのシーン

ふああ?!

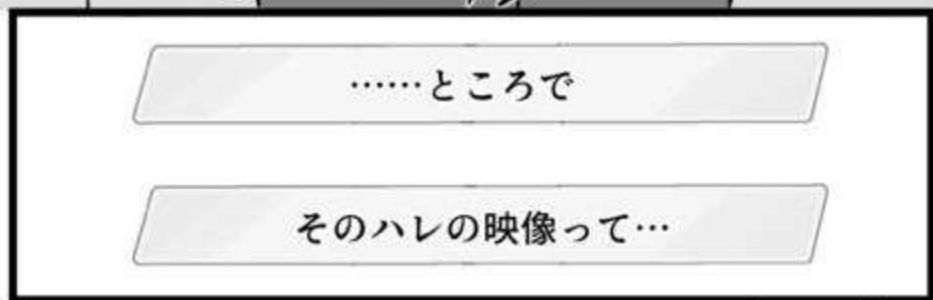
嫌め!!

ガタッ



計測中における対象の
表情や音声、脈拍など
心身バイタル解析の結果

対象は直近数分間の
行為にかなり好意的な感情を
抱いていると判断します



.....ところで

そのハレの映像って...



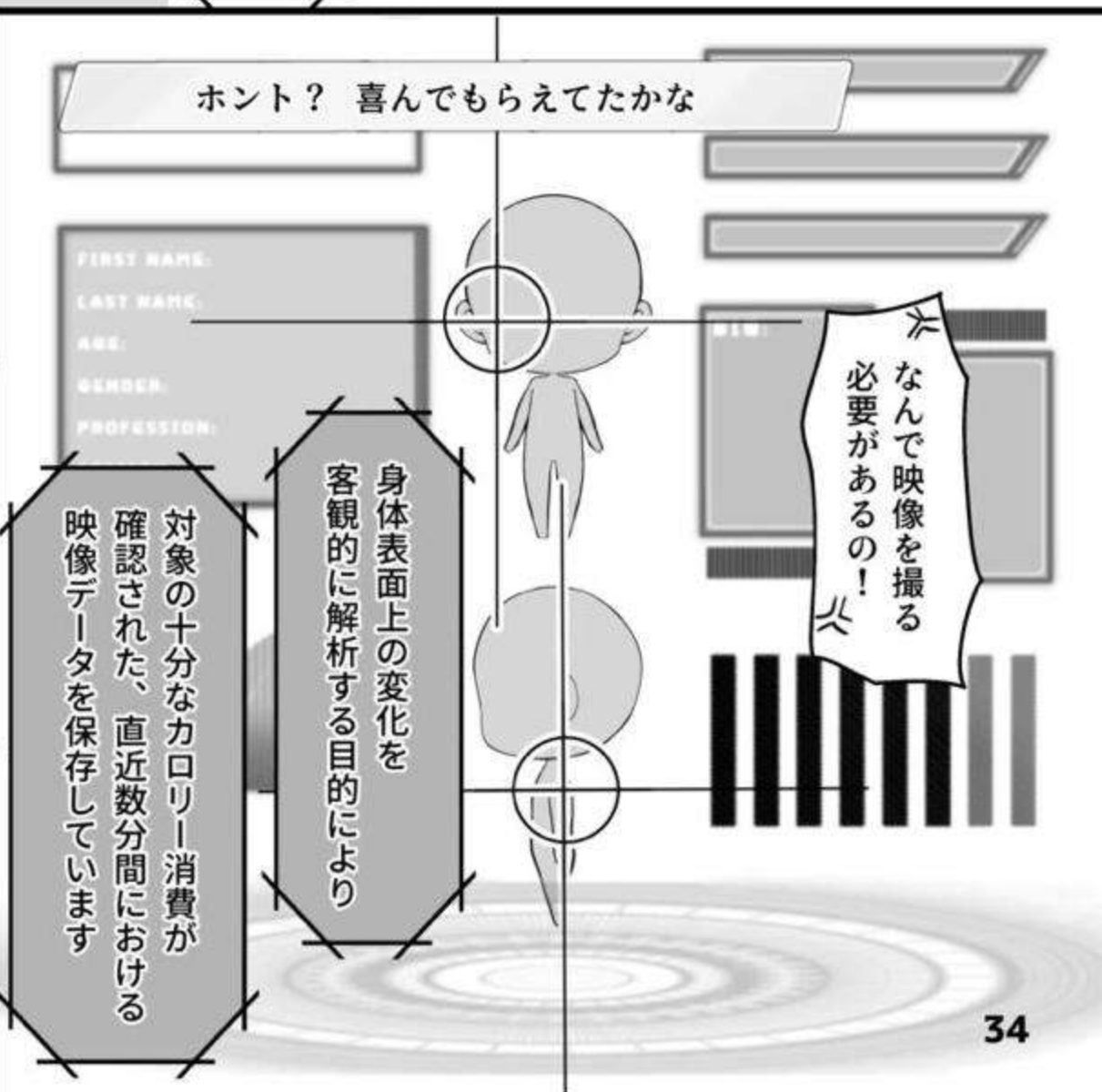
えっ、イヤッ!
恥ずかしいから
駄目っ!

表情・音声分析完了...
対象「小鈎ハレ」は
嘘をついてい

緊急停止っっ!!

おわり

よろしくお願いします



ホント? 喜んでもらえてたかな

FIRST NAME:
LAST NAME:
AGE:
GENDER:
PROFESSION:

なんで映像を撮る
必要があるの!

身体表面上の変化を
客観的に解析する目的により

対象の十分なカロリー消費が
確認された、直近数分間における
映像データを保存しています



ねえ先生

んにゃー

※サボリ中

こんなの
落ちてたんだけど

どうしたの
カズサー

何？

これ

かかかカズサ

その本
一体どこで……

んー？

先生のベッドの下
だけど

それ
漁ったって
言うんだよ!?

あったあった

おっ

湿度高めの彼女面ネコミミ生徒にくすぐりフェチがバレて甘々くすぐりプレイしてもらいたい本

黒蜜きなこ餅



『湿度高めの彼女面
ネコミミ生徒に
くすぐりフェチがバレて

やめて

甘々くすぐりプレイ
させてもらいたい本』

ね……

許して

ふーん……

先生って
こういうのが
好きだったんだ……

彼女面て



私に
こういうこと
したいの？

それとも――

……っ



されたいの？

さわ……

ちよっ

待っ――





それじゃあ

ちよつと時間
もらうね？

んっ……♡

せんせい♡

翌日

おなか痛い……

わらいすぎた

先生……

拾い食いでも
したんですか？

ナツちゃんじゃ
ないんですから

先生がそんなこと
するわけないでしょ

ナツじゃあるまいし

君たち

おしまい



にはは…

拘束はちよつと
やり過ぎじゃ
ないですか…？

ねえ
ノア先輩…

あら、そっ？



何度も反省部屋
から脱走する
うさぎちゃんの
措置としては妥当
だと思えますけど♪

おしおき！
作：しんや丸

昨日も抜け出して
先生の所に行って
いたそうですね…

偶然だと思いますが
複数の生徒から「先生
から妙な内容のモモ
トークが来ている」と
相談がありました…

なにか心当たり
などありませんか？

さ、さあ…？
何なんでしょ
うかね…？

もともと変な人
ですし？それが
平常運転なん
じゃないです？

なんでそんな事を私に
聞くのかいまいち理由
がよくわからな…

ひゃあ♡

ズボ

本当に…何も
知らないんですか？

んあはははは!!
ごめんなさい!!
私が送りましたあ!!

素直でよろしい

良くないこと…
というのはわかっ
ていますか？

しかしどうして
そのようなことを？

先生がつつあははは!!
他の人とお!!楽しそう
にチャ、チャットして
るのが悔しくてえ!!

わがりました!!
わがりましただ
からもうやめて
くだひゃい!!

そうですか…
ちゃんと反省して
いるようであれば

あと30分程したら
やめてあげますので
それまでしっかりと
反省してくださいね♪

しよ、しよんな…
あひゃ…えはは…

そ、そんなに続け
られたら絶対狂う…
お、おがじくなる!!

には…
は…





あ、あはっ、な、何のつもりいいいっ
く、くすぐったっ　　ゝゝゝゝゝゝゝ
ぷっひやはははははははははははっ!?

ほくら、早く話しちやつてくださうい
私も残業したくないですから
それとも、笑い死にしたいんですかあ？

「……っ、だ、だからっ、
言わないっていつてるで
しょおおお!?」

てか、なんで
くすぐりいいいい!!?

ごごめんなさいっ、
本当にイイイイっ!
ホントにしらな
ツつぷっひやははは
ははははっは!?

ゴッ

ゴッ

何それッ、何ソレっ、
なにソレえええええ
ゝゝゝゝゝっへへへへ!
ああああゝゝゝゝゝ
ぎやつひやははは!
もうやめええへえええ?

助けに
来たよ!!

アルちゃん!!



あつ、
もう何でも話しますッ
何でもはなしますからあ!!

マハハ

おつ、
それホントにい
きつひいいいッ!!

やめー

うん、
見なかったことにしよっ

パッ

すー



ここから小説



Now Loading...♡

いらねえとばかりみちく

被験体123のくすぐり羞恥実験

メロウパン

連邦生徒会の手が及ばない自治地区、ブラックマーケット。司法が介入しづらいことをいいことに、違法な銃火器や闇金の取引が行われており、この地区専用の治安機関があるというほど。そのような無法地帯ぶりから、犯罪の温床地ともなっている。

そんな危険地帯の一角で、ある一枚の広告を手に持つ少女が一人。

「新型マシンのモニター募集中……？」

阿慈谷ヒフミ。亜麻色の髪をおさげで結んだ、素朴でおっとりとした雰囲気少女である。

キヴォトス有数のお嬢様学校である、トリニティ総合学園の制服をまとった彼女がなぜ、治安の悪い場所にいるのかというところ。

「ペロロ様限定グッズ、しかも、数量だけ生産された後にすぐ廃盤になったものじゃないですか……！」

そう、彼女が好きなキャラクターグッズを求めて、ここにやって来ていたのだった。

可憐で清楚な見た目とは裏腹に、好きなものになると大胆な行動力を見せる彼女は、ブラックマーケットに出入りしている回数も二度、三度どころではなかった。

さらに、成り行きとはいえないアビドス高校の生徒たちとカイザー銀行を襲ったこともあり、一部の人の中ではもっぱらの噂となっているらしい。

「でも、これって罠かもしれませんか……」

ブラックマーケットには、他所では手に入らない代物に引っかかった生徒を人体実験している企業もあるのだとか。

ヒフミの頭の中では、物欲と理性の天秤がユラユラと動いていた。「ああ、ですが……」

報酬としてもらえるペロロ様のグッズは、ヒフミが喉から手が出るほど欲しいものであった。この機会を逃してしまえばきっと、二度と巡り会うことができない代物であることは間違いないだろう。

「どうしましょう、どうしましょう……」

チラシ片手に、後頭部に手をやるヒフミ。

ヒフミの中の天使がささやく。こんな場所に入り浸っていることをナギサ様に知られたら、顔向けできないのではないかと。

「そ、そうですねっ……！ ブラックマーケットに出入りしているなんてナギサ様にバレたら」

しかし、対抗するようにヒフミの中の悪魔がささやく。

非合法の取引なのだから、地に足がつくことはないだろうと。

「うう……っ！」

チラシの紙を握りしめながらヒフミは、うんうんとなっていた。

天使と悪魔のせめぎ合い。左右にユラユラと揺れる理性と物欲の天秤。

ヒフミが下した決断は――

「や、やっぱりのチャンス逃すわけにはいきません！」

彼女はチラシを片手に握りしめると、例のモニターが行われる場所まで駆け足で走っていくのだった。

「ここが、モニターの会場……」

そうしてヒフミがたどり着いたのは、中心街にあるガラス張りの高層ビル。外見だけなら、ミレニアム学園にありそうな立派な研究機関のように見えた。

「モニター希望の方ですね。こちらにご案内いたします」

ヒフミの姿を見るやいなや、中から接客用のロボットに研究所の中へと連れられていく。

そうして案内されたのは、巨大な機械が中央に鎮座した、広々とした実験室だった。

「阿慈谷ヒフミ様ですね。我が社の実験にご興味いただき、感謝いたします」

部屋は薄いアクリル板で二つに仕切られており、透明のガラスの向こうには、コルクボードを持った研究員らしき女性二人が立っていた。(な、なんで私の名前を知っているのでしょうか……?)

「それでは、今から行う実験について簡単に説明させていただきます」
丁寧だが機械的な段取りとともに、実験の概要と注意事項が述べられていく。

「この実験では、後ろに見えますマシンの性能チェックが目的となっております」

「は、はあ……」

「本実験では性能チェックのために、ヒフミ様を拘束させていただきます」

「こ、拘束ですかっ……!?!」

物騒な言葉にヒフミの表情が不安に染まる。

「はい、マシンの動作が終わるまでヒフミ様の手足を機械により拘束させていただきます」

「実験の概要および契約情報に関して、ご理解いただけたらこちらにサインを」

アクリル板の上に、ホログラムで生成された契約書が投影される。

契約書の一番下にある空欄に、指で署名できるシステムになっていた。「ううっ、いったいどうしたらいいのでしょうか……?」

契約書にサインしたらもう引き返せない。

ここまで来てしまった手前、引き返しづらいという心理が彼女にはあったのだろう。ここから逃げ出そうという考えには至らない。

「もし我々の実験に協力していただけるということであれば……」

ヒフミを甘い蜜で誘うがごとく研究員たちは、ペロロ様のグッズをちらつかせてくる。

その誘惑に、ヒフミは負けた。

「じ、実験は今日だけですし……きつとすぐ終わりますよね……」

気がつけばヒフミは、指先で契約書に署名をしていた。

実験に対する恐怖よりも、ペロロ様グッズを手に入れられるという高揚の方が上回ったのだろう。

「ではヒフミ様、あちらの機械にお座りください。ちなみにここからはヒフミ様ではなく、被験体番号の方で呼びいたしますので」

「は、はい……」

ヒフミは言われるがままマシンに座る。彼女の顔には不安と緊張が滲み出ており、身体もどこかこわばっていた。

「わわっ、身体が拘束されてっ……!」

機械が作動し、ヒフミの両手両足がアームによってガッチリと拘束される。X字の形で固められてしまったヒフミは、自由に動けなくなってしまった。

「被験体番号123、ためしに身体を動かしてみてください」

言われた通りに手足を動かしてみるものの、拘束具に囚われた四肢はびくとも動かない。加えて、人としてみてもらえていないという寂しさにも似た感情のせいで、心が不安に蝕まれていくのを感じていた。

「どうですか？ 緩くないですか？」

「い、いえっ……！ ガチガチですね……」

身体をガッチリと固定されている感覚にヒフミは、実験の始まりを予期して額にじんわりと脂汗を掻き始めていた。

「皮膚の表面の発汗量増加を確認」

「血圧、心拍数の上昇も見られる模様。拘束により対象は心理的ストレス・不安が高まっているようです」

ヒフミを囚えるマシンには生理指標などを測定する装置も埋め込まれており、バイタルチェックの他、対象の心理状態を把握することも可能となっている。

「では、実験の方を始めていきます、被験体123」

研究員がスイッチを押すと、ヒフミを拘束する機械が動き始める。

「へっ……？ なんですかつ、これ……っ！」

ヒフミの目の前に、無数のマジックハンドが顔を出す。それにヒフミは驚きを隠せなかった。

「これから被験体123に対する感度検査を行います。対象者は我慢せず、ありのままの反応を見せてください」

感度検査。聞き馴染みのない言葉に、ヒフミはゴクリと唾を飲み込む。

不安を前にヒフミの思考はネガティブな方へと転げ落ちていき、それがさらに不安を生むという悪循環を生み出していた。

「それでは、実験を始めます」

研究員の合図とともに、マジックハンドがヒフミの身体に伸びてくる。

最初に感度検査の対象となったのは、結んだ髪の毛からはみだした、小さな両耳であった。

「っひゃう!?」

触れた指先から、電流のような刺激がゾクゾクと伝わってきて、高い悲鳴をあげてしまう。

「耳の感度良好です。ソフトタッチによる責めを続行します」

マジックハンドはヒフミの耳の輪郭に沿って、細い指先でスリスリと撫で続ける。

「んっ、くくくっ……んひゃ、っふふふっ！」

マジックハンドも同じ触り方をするのではなく、耳の穴に指を振じ込んだり、柔らかい耳たぶをフニフニと揉んだりして、ヒフミの反応をつぶさに確かめていく。

「耳の穴が特に弱いようです。指が振じ込まれたときの腕力が、他の部位を触られたときと比べて有意に高いです」

けっして大笑いするほどの刺激ではない。

それでも、さざなみのようにゆっくりとやって来る刺激にヒフミは、声を漏らしてしまう。

「ときおりいいれんのような反応。笑い声はそこまで大きくないようですね」

「そうみたいです。感度は十段階の三といったところでしょいか」

「あひっ、んひゅ、んふふふっ……！ そ、そんなにみられるとはずかしっ……ひゃっ……！」

観察されて恥じらいを感じていたヒフミの顔は、りんごのようにほんのりと赤に染まっている。

「あはっ、んひっ、ひひひっ、ツンツンだめえっ！ んひゃ、あはっ、あははははは！ おなかさすらないでくらしやいいひひひ！」

お腹やヘソも感度は良好であった。しかし、脇腹や腋の下よりは反応が劣っていたのか、感度はそれぞれ七・八と評定された。

「次は下半身ですね。太ももと膝を調べていきます」

ウィーンと音を鳴らしながら、マジックハンドが太ももと膝に触れる。

「んんっ、くふふふふっ……！ ひやつ、なんかっ、ゾクゾクしますう。むふっ、んんっ、ふふふふふふっ……！」

黒タイツを一枚挟んだ素肌をスリスリ、サワサワと撫でられ、はにかみが混じった笑い声を漏らす。声量は先ほどよりも大きくなり、反応も小さい。

「太ももは四、膝は三といったところでしょいか」

「先ほどよりも反応が芳しくないみたいですね。他の方法を検討しますか？」

「いいえ、大丈夫です。これはあくまで感度検査ですので」

太ももと膝へのくすぐりは早めに終わり、ヒフミはホッとした。

「はあ……はあ……」

さほどくすぐったくなかったとはいえ、まだ余韻が残っているのか、ヒフミの顔はのぼせたようにほんのりと紅潮している。

そんなヒフミに休憩を与えぬまま、研究員は最後のチェックに移る。

「最後に足裏をくすぐります」

「今から靴を脱いでいただき、こちらのブーツを履いていただきます」

「く、靴を脱いでですか……？」

足裏をくすぐられることを想像し、ヒフミの顔から一気に血の気が引いていく。

「はい、こちらのブーツの都合上そうしていただきます」

ヒフミは抵抗できぬまま、つま先からゆっくりと靴を脱がされていく。

「……タイツも脱がしてしまいませんか」

「ええっ……そんなっ、きやああっ」

そうして露わになった足裏はほんのりと汗ばんでおり、皮膚がふやけているのが分かるほどだった。

「やああ……み、みないでえ……」

足裏をじっくりと観察されながら特製のシューズを履かされ、ヒフミはいたたまれない気持ちになる。足裏を眺められることに慣れないヒフミは、ソワソワと身体が動いてしまうのだった。

「な、なんか硬いのが当たって……」

ヒフミが違和感を訴えるものの、研究員は構うことなく装置を作動させる。すると――

「んんっ!? んふっ、んふふふふふふっ！ やあっははははは！ な、なんですかこれえへへへへ！ あしがゾワゾワってえへへへへ！」

ヒフミは、シューズの靴底で蠢く何かに耐えられず、笑い声を響かせた。

「そのシューズの中には、磁石駆動のブラシが入っていて、足裏の各部位をくすぐるように回転する仕様になっています」

「足の裏は敏感なポイントが多い部分ですから、一度にまとめて調べたほうが効率がいいのです」

「ああっはあっははははは！ やっ、あはははははははっ！ ぜんぶくしゅぐったいですうふふふふふふふ！」

「先ほど感度検査を行っていた際、羞恥の感情とともに感度が増すという興味深いデータを得られました」

「そこで我々は考えたのです。実験計画を変えれば、より面白いデータを得られるのではないかと」

あつという間にヒフミの制服はスカートを残したまま脱ぎ捨てられ、上半身は下着の姿になっていた。

肩幅が狭く、肋骨がうっすらと浮き出た華奢な身体。それに反して、お椀型の綺麗な形をした胸は程良い大きさであり、谷間にはうっすらと汗が滴っている。

そして美乳を包みこむ純白のブラには、ヒフミのあどけなさを象徴するような、ふんわりとしたフリルが施されていた。成長途中といった風の胸が、かえってエロスを引き立てているようだ。

「やつ……！ みないでください……！」

同性とはいえ、相手はヒフミの嫌がることを強行してくる相手。下着姿を見られることに羞恥を覚え、せめてブラを隠そうと必死に手を動かす。しかし、ヒフミの手首を捕える拘束具が、抵抗を許さない。「先ほど身をもって体験したはずです。この拘束具は、けっして外れないということを」

「無駄な抵抗をしても、体力が削られるだけです。やめたほうが賢明だとは思いますが」

研究員たちは、ヒフミの抵抗を静観していた。彼女が諦めて、おとなしくなるその瞬間を待ちながら。

そしてヒフミが息を切らし始めたタイミングを見計らい、片手に持っていたリモコン型の装置で、何かを起動する。

「へっ……？ な、ああ……っ」

ヒフミの目の前にあるモニターに映し出されたの。それは、七×七の画面越しに見える、多くのオーディエンスたちだった。

「やつ……み、みないでっ……！」

全員が、ヒフミの下着姿を見ている。

ある者はヒフミの未成熟な身体に鼻を伸ばし、またある者は女性の象徴にじつくりと目を凝らしている。

「いやっ、いやああああ！」

まるで全身を焼き尽くすほどの辱めを受けたヒフミは、その場で叫び喚いた。

「ストレス値が急増。これまでと比較にならないほど高まっているみたいです」

「急性の反応だから、対処しなくても問題ないはず。むしろ、我々が期待していた通りのシチュエーションなのでは？」

そう、ヒフミが周知を感じる状況を作り出すことが、研究員たちの目的であった。

「いやっ、みないでくださいっ！ おねがいですからあつ！」

腕と足を縛る拘束具を引きちぎらんばかりに暴れるヒフミを前に、研究員たちは表情ひとつ変えずにヒフミの様子を観察する。

ヒフミは画面の向こうの人たちに懇願するも、彼女の半裸姿は向こうの人たちに公開されたままだった。

「その方たちは、私たちに研究資金を提供してくださっているスポンサーの方々ですよ」

「少々特殊な癖をお持ちのようでして、今回は清纯そうな女の子が羞恥とくすぐりで悶える姿を見たいと……って、聞いてませんね」

「まあいいでしょう。もう少し放置して、彼女に恥ずかしい想いをたっぷりさせましょうか」

そうして研究員たちは、下着姿のヒフミをあえて衆人環視にさらし続けた。

「いやっ、いやああ……」

ヒフミの声は徐々に小さくなっていき、視線から逃れようと俯いてしまう。

結果、ヒフミの羞恥心は急上昇。彼女たちはヒフミにさらなる辱めを与えるべく、次の行動に出る。

「いやっ、なにするんですかつ！　へんなことしないでくださいっ……！！」

拘束され、動かないヒフミの足裏が、徐々に上に持ち上げられていく。

その結果、足裏を頭の方まで上げられてしまい、まんぐり返しの姿勢を強制されることになった。オーディエンスの視線は当然、ヒフミの股の間へと向けられる。

「あっ、あああっ。いやああ、みないでえ！」

スカートを抑えようとするも、手は拘束具で固定され、パンツを隠すことすら許されない。無理やり恥部を晒される恥ずかしさに、ヒフミの顔は紅葉色に染まっていた。

さらに、マジックハンドによってヒフミのスカートはたくし上げられ、よりパンツの見える面積が広がってしまう。

「ああっ、スカートめくらないでっ……！！」

しかも、ヒフミのパンツを見たオーディエンスから、チャット画面を通じて何通ものメッセージが送られてくる。それらがまた、ヒフミの羞恥を煽るものばかりだった。

『この子の下着濡れてる？』

『見られて感じちゃったってこと？』

『清楚な見た目のわりにえっちな子なんだね』

『白かあ。たしかに白っぽいもんね』

『もっとアップで見せて』

チャットルームは、ヒフミのパンツについた染みを指摘するコメントで大盛り上がり。これでは、精神的な集団リンチと変わらない。

「ああっ、うううっ……」

画面向こうの熱狂とは逆に、羞恥心に耐えられないヒフミは、目をうるうる潤ませる。

「羞恥度上昇を確認。実験開始時の約六倍の数値です」

「では、実験の方を再開するとしましょう」

視線による羞恥責めは想像以上の効果を発揮し、実験の準備も整った。

「いやっ……やめてっ……！！」

マジックハンドの指先が、ヒフミの汚れを知らない身体を毒牙に掛けようとしていた。

ワキワキと動く指先を認識したヒフミの脳内に、先ほどの感度検査の光景がフラッシュバックする。

『もう笑ってる』

『そんなにくすぐり弱いんだ』

『楽しみ』

『おっぱいとお〇んこくすぐり希望』

「実験の中断は禁止されています」

研究員は相変わらず機械のように、契約書に記されていた内容の一部を引用し、ヒフミに淡々とした様子で告げる。

「で、ですからっ……！」

ヒフミは実験の中止を必死に懇願するも、研究員たちは聞き入れてくれない。

彼女たちが興味あるのは、ヒフミから取れる貴重な生体データの数々だった。

人の心や身体に著しい苦痛を与える非合法な実験など、キヴォトスで認可されるはずがない。だからこそ、ブラックマーケットを隠れ蓑にして、この研究所はおぞましい実験の数々に手を染めているのだ。

「次の実験では、感度を数百倍に高める成分を含んだ媚薬ローションを身にまともってもらいます」

「すうひやくっ……!? そ、そんなことされたらこわれちゃいますっ……！」

「今までの実験であなたのバイタルサインに大きな乱れがないことは確認済みです。実験の続行をいたします」

するとマシンから先端がチューブ状になったアームがニョキッと姿を現す。その噴出口は、ヒフミの身体に向けられていた。

「ひっ……! もうやめてくださいっ……！」

まるで銃口を突きつけられたような恐怖が、ヒフミの身体を凍らせる。必死にもがいて逃げようとするも、ガッチリと固定された手足はびくともしない。

逃げられないと知りつつもがき、あかくヒフミの姿に、向こうから眺めているオーディエンスたちは興奮を露わにしていた。

「ジタバタ動いちゃってかわいいねえ」

『そんなに必死になっちゃってww』

『よっぽど逃げたいんだあ。そんなことしたってムダなのにww』

無駄な抵抗をするヒフミの姿に、オーディエンスたちは愉悦の笑みを浮かべている。

真性のサディストである彼らは、ヒフミが暴れれば暴れるほど、興奮せずにはいられないようだ。

「ローションに含まれる媚薬成分の濃度が適量であることを確認」

「ローション噴射の前にまずは――」

ヒフミはまだ、下着を着ている。ヒフミの純潔を覆い隠す、最後の砦ともいえるべきものだろう。

しかしそれは、ローションの効果を実証実験するにあたっては邪魔なものではない。当然のごとく、マジックハンドによってヒフミの白い下着を剥いでいく。

「あああ……! いやっ、脱がさないでくださいっ……！」

しかしヒフミはなす術もなく、ブラのホックを外され、クロッチに染みがついたパンツも下ろされてしまう。

衣服を全て脱ぎ去ったヒフミの肌は、絹のような肌触りを彷彿とさせ、水光のようにキラキラとまばゆく輝いていた。

それを今から汚されてしまうのだ。実験用に調合された特製のローションと、これまでヒフミの身体を弄ってきたマジックハンドによって。

「ひゃっ……！」

『ニップルドームも追加してほしい。報酬に糸目はつけない』

くすぐりフェチだけでなく、人には言えないような性癖を持ち合わせた変態紳士たちが、この場にはこぞっている。

チャットルームを飛び交うのは、ヒフミの乱れる姿に興奮するコメントや、拷問のような内容のリクエスト。

彼らは普段発散できないどす黒い欲求を、ここで発散しようとしているのだ。

「ニップルドームですか。たしかに、性感帯への影響を調べてみるのは興味深いですね」

あらかじめ準備されていたのか、ドーム状の機械の中に筆のアタッチメントが取り付けられたニップルドームをヒフミに装着する。

「ふおおおおお!? いにやあああはははははははははははははははは♡ やあああー！ー！ー！つはは!! にやにこれえへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ!! ちくびっ、フサフサなやつでっ、こんなのムリいつひひひひひひひひひひひひひひひ♡」

極限まで高められていたのは、ぷっくりと膨張した桜色の乳首も同様のようだ。

ニップルドーム内に接続された筆で、突起全体を柔らかい毛先でシリシユリとなぞられている。もともと媚薬ローションということもあって、快感を高める作用も含まれているようだ。

「ああああー！ー！ー！ー！つはははははははははははは!! イ、イクっ……♡ イっちゃいますううふふふふふふふ!! んんっ、ひやわああああああ♡ あっ、ああああっ……!! めめめめめめめめめめめめめめめめ♡」

オーガズムのてっぺんに達したヒフミは、顔をのけぞらせ、無様にも大量の潮を吹いてしまう。

『おおっ、JKの貴重な潮吹きだ!』

『清纯そうに見えて意外と大胆なんだなあ』

『まだまだイけるよね?』

チャットルームの方も、ヒフミの身体を張ったパフォーマンスに大盛り上がりだった。その一方で、快楽責めを織り交ぜたくすぐりを快く思わない者もいたようだ。

『私たちは絶頂している姿を見にきたのではない』

『はやく……はやく笑って苦しんでいるところを見せてくれ……っ!』

「……だそうです、主任。彼らの不満が高まれば、スポンサーの降板も……」

「それはわかっています。でも、そろそろ効き目が切れてくる頃でしょう」

そして、媚薬ローションの快楽作用のみが消えれば――

「めめめめめめめめめめめめめめめめ!! ひいつ、ひいつひひはあはははははははははははは!! にやにこれええー！ー！ー！ー！つへへへへへへへへへへ!! くしゅぐつらあっはあー！ー！ー！ー！」

突如、すさまじいくすぐったさが雷鳴のごとく降り注ぎ、ヒフミの絶叫がこだました。

「すごいっ……!! こんなに叫んで……」

「この媚薬ローションは数十分すると快楽作用が消え去る。快楽を感じていた分、くすぐりの苦しい側面が強調されて、被験体は地獄のような苦しみを味わうことになります」

「つまり今は、ヌルヌルしたローションのせいで被験体123は壮絶なくすぐったさを味わっているということですね」

「そういうことです。さあ、データを収集し続けましょう」

グチュグチュと、ローションがマジックバンドの指と擦れて、グロテスクな音が聞こえてくる。

幾度となくくすぐられたヒフミの身体は、引つ掻き傷の跡が無数に残っており、真っ赤に腫れ上がっている。見る者が思わず目を背けてしまうほどの、痛々しい光景だった。

「いいっ、ふひやああー……っはあっはあは!! やべっ、もおやめれくらひやひひっひい……っはあっはあは!! ーっひひひひひひひひひひひひひひひひひ!!」

呂律が回らなくなった声でヒフミは、必死にマシンの停止を訴えかける。

当然、ヒフミの懇願は突っぱねられることとなり、実験は粛々と進められていく。

「くるひっ、くるひいれしゅうー……っふふふふふふふふふふ!! けほっ、けほっ……!! だれがっ、だれがだっでえええへへへへへへへへへへ!! いやっ、ごほっ、げほっげほっ……!!」

口を開けっぱなしにしていたせいで、ヒフミは唾を気管支の方に飲み込んでしまい、盛大にむせてしまう。

「対象が呼吸困難を起こしました。すぐに酸素マスクの用意を」

くすぐりの実験には呼吸困難のリスクが伴う。

そのため、いざというときには、補助スタッフたちがヒフミに酸素マスクをつけ、呼吸の管理を行うことになっていた。

酸素を供給されたことにより、ヒフミの呼吸は安定し始めていたが――

「ひやああああー……っはははははははははははははは!! にや、にやあはははははははははは♡ またからだがウズウズってええ♡ むりっ♡ またイっちゃううううふふふふふふふふふふ♡」

「主任、もしかして媚薬ガスを混ぜたんですか?」

「ご名答。実験はこれからが本番ですから」

再び快楽漬けにされてしまったヒフミは、先ほどよりも勢いよく、白濁の飛沫を噴射する。

ヒフミの秘部はたび重なる絶頂により、愛液でぐちゃぐちゃにとろけていた。

『トリニティ生徒にあるまじき破廉恥な姿!』

『こちよこちよで感じてしまう生徒にお仕置きを!』

そして、媚薬の効果が切れてしまうと――

「いひやああああー……っはははははははははははははは!! だめっ、だめえええっへへへへへへへへへへ!! ムリっ、たえられなひっひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ!!」

「それにしても、気持ちよかった分、媚薬の効果が切れたら辛いでしょうね」

「人間は希望から絶望に叩き落とされたその瞬間、最も強い感情エネルギーを生み出します。今回私は、それを検証したかった。名付けるなら、天国と地獄実験といったところでしょうか」

実験のネーミングセンスはともかく、やっている内容は鬼畜そのものであり、かつキヴォトスでも誰も手を出したことの無い悪魔のような実験だった。

「過去には、身の毛のよだつような人体実験が幾度となく行われてきました。しかし、今では禁忌とされていることをなしてきたからこそ、今の我々がいる」

ヒフミが顔をぐちゃぐちゃにして笑う姿を見ながら、そこに一抹の希望を見出すような視線を向ける研究主任に、部下は畏怖の念を覚えずにはいらなかった。

「そして、一度希望と絶望の両方を知ってしまった人間は、希望に縋ることを覚えてしまう。被験体123、媚薬ローションの追加投入を希望しますか？」

「はっ、はひいひひひひひひひひひひ!? おっ、おねがいしまあああはははははははははははは!!」

「なんですか? よく聞こえませんでしたので、もう一度、ハッキリとした声で」

「おねっ、おねがいしましゅうふふふふふふ!! わっ、わらひにっ、きもちーのぶっかけてくらしやいーーーーーーーーーーーっひひひひひひひひひひひひひひひひ!!」

ヒフミは自ら、快楽漬けになることを選んだ。

「希望から絶望へ、そして絶望から希望へ。私はその相転移をこの目で確かめてみたかったのです」

「結果、被験体123は、苦痛を先延ばしにするために、快楽を選んだと。結局はなんの解決にならないことを知りながら」

「そうですね。きっと違法な薬物に手を出す人の心理に通ずるものがあるでしょう。実験は成功でしょうね」

ローションが注入され、ニップルドームの中の筆が高速回転する。ヒフミは目をトロンとさせながら、注ぎ込まれる快楽をこぼさぬよう、しっかりと体感する。

「あっ、ああああああああ♡ しよれくしゅぐっらいれしゅううふふふふふふふふふふふふふふふふ!! んくひゅうふうっふふふ!! あはっ、あーーーーーーーーーっはははははははははは♡」

特に乳首はすでに開発されたこともあり、筆が数度回転するだけで身体をビクンビクンと動かしていた。

もはや羞恥など感じていられる余裕すらなかった。そんなことに構っていたら、再び辛いくすぐり地獄を受けるハメになるのだから。

「すっ、すごいっ……!! どの部位でも破格の感度指数を示していますっ……!! これも実験の効果なのでしょうか……?」

「副産物に近いものですが、これで対象を拷問、そして自白させるための拷問マシーンを作ることにも可能になったでしょう」

二人の研究員が難しい話をしている間、下衆なスポンサーたちはヒフミが快楽に負け、淫らな姿を晒している光景を目に焼き付ける。

チャットルームは、ヒフミがゾッとするようなコメントであふれかえっていた。

『おっぱいめっちゃ揺れてるww』

『何度もイキちらかして、これはお仕置きが必要かなあ?』

『この子の笑い顔だけで、一日に何回もイけますねえ』

カナナVSマジックハンド

キノコアザラシ

[$\dots$]

尾刃カンナを意識がゆつくりと覚醒する。そして、すぐに現状の異常さを認識する。

下着しか身につけておらず、分娩台のような機械に拘束されている。足はM字に、両腕はまっすぐ上に伸ばして拘束されている。

「な、なんだこれ……!？」

体を揺るががちりと拘束されており、びくともしない。

『対象の覚醒を確認。実験を開始します。室内の防音機能を有効にしてください』

そんな機械音声が流れると、カンナが拘束されている椅子から2本のマジックハンドが生えてくる。

「……」

カンナが注意深くマジックハンドを観察していると、それらは突然力
 ナの胸に無遠慮に触れた。

「ひや……っ！」

思わず甲高い悲鳴がこぼれそうになつたが、なんとか抑え込む。

「や、やめろ！おい！！」

マジックハンドの動きは止まることなく、カンナを胸を揉みしだく。優しく、痛みを与えないように。

時折優しく乳頭を指が弾く。

「ふっ、く……んんっ」

その刺激にカンナの口から甘い声が漏れる。

「はーっ、はーっ……」

荒い息をあげるカンナ。そんなカンナに次の刺客が迫りくる。

胸を刺激し続けるマジックハンド。それとは別に更に椅子からマジックハンドが2本生える。それらはカンナの視界の外からそつと腋の下へと迫り、そして。

カリツ

「んひひひひひ！？」

人差し指が軽くカンナの腋の下を引っ掻いた。それと同時にカンナの口から悲鳴があふれた。

「あ、あひやひやひやひや！？や、やめつ、やめろっほほほほほ！！」人差し指がカリカリとカンナの下を引っ掻き、胸を責めるマジックハンドがカンナの両胸の突起をいじる。

「んはあつ、やめつ、とめるこのっ!? あはははははははははは!!」

胸に添えられたマジックハンドが乳頭をつまみ、クリクリと刺激する。甘い吐息と笑い声が混ざった声がカンナの中からこぼれる。

「やめろおっ！ 腋はだめえっ」

そんなカンナの懇願が通る事なく、腋の下を引つ搔く指の本数が1本から2本、3本と少しずつ増えていく。

[illegible]

「くひっひひひっ！やさしいのだめっちかりやぬけりゅっ！」

再度絶頂。股から愛液だけでなく、潮も吹き出る。それらが床を濡らす。すがカンナはそれに羞恥を抱く段階ではない。

その刺激が背筋を走り、脳を焼く。

「！！」

セミナーのくすぐり女子会議事録

黒羽リズ

「はあ……この部活もあんな企画ばかりで、予算を上げてもらえると本気で思っているのかしら。だとしたら相当な末期だと思うのだけど」

学園都市キヴォトスに存在するミレニウムサイエンススクール——その学生寮の中のある一室で、物憂げな少女の声が空気に溶けた。

今しがた重い溜息を吐いた少女の名前は、早瀬ユウカ。ミレニウムにおける生徒会、「セミナー」に籍を置く“会計”担当の女生徒である。

そんな彼女は、深い皺を眉間に刻み、渋面を作りながら唸っていた。

頭痛を堪えるようにこめかみを押さえているその所作は、どう考えても年齢相応の仕草ではない。

四十を越えた平会社員が浮かべるような沈痛とした面持ちを浮かべながら、低い声が唇の端からぼつぼつと零れだす。

「見通しが甘いというか地に足が付いていないというか……端的に言って真剣さが足りないんじゃないかしら。もしかして私達、おちよくられてる？」

ユウカが頭を悩ませているのは今般行われた予算審議会についてだろう。

四半期ごとに開催されている、部活や委員会の来季予算を決定する重要な会議である。

本日実施されたその審議会であるが、正直に言って実りのある内容とは言い難かった。

いいやむしろそれで言えば今回だけに限った話でなく、前回も前々回も、実りのある会議ができた記憶など直近で存在した記憶がない。

その理由は今ユウカが口にした通り、どの部活の企画も、実用性があるものと思えないからだ。科学の発展……ひいてはミレニアムの利になる企画が一つでもあれば、セミナーとしても予算を上げるのも吝かではない……むしろ大手を振って予算を捻出するのだが、そういったものが一つもない。

ばかりか、どの企画もふざけているとしか思えないようなもので溢れているというのが実情であった。

確かに所詮自分たちは学生だ。いくら科学力を重んじている組織とて、どこまでいってもここは学び舎。学校である。自分たちはまだ子供という自覚も、子供だからこそ至れる柔軟な考えもあるということとはゆめ忘れてはいけないと思う。

だが、しかし……

「こういうのはケースバイケースでしょ。学生だからって何でもお遊び気分でもいいわけじゃない」

特に金銭が絡む時は。金が絡むということは、責任も同時に発生するということだ。

ゆえにこちらとしてもおいそれと予算を増やすわけにはいかない。何でもかんでも見境なしに金をつぎ込んでいたら、干上がるのは自明の理であるしだからこそ選定する必要がある。

そのことを生徒たちにも分かってもらいたいし、聞き分けて欲しいというのに……あいつらと来たら……

「こつちだって好きで却下してるわけじゃないのよ!? 予算増やして欲しかったらそれ相応の企画を持ってこいって言ってるの! それなのに、ゲーム開発部……特にモモイと来たらあ!」

先までうなだれるように語っていたユウカの語調が、あからさまに熱を灯す。

瞳の中には、ゲーム開発部所属の一年——才羽モモイの顔が浮かんでいた。

「何がわからずやよ! 何が鬼のユウカよ! 言うに事欠いては太ももおばけってどういう見よ! っていうかそれをわざわざみんなの前で言う必要がどこにあったの!?!」

ユウカが吠えているのは今日の審議会でのことだろう。

いつも通り予算を増やしてもらおうべく企画を提出したゲーム開発部だったが、無情にもユウカに却下されたのだ。

その際にモモイが激発し、ユウカを揶揄するような蔑称を連呼したのだ。それも、数多の部活や委員会生徒が集まる皆の前で。

その時に感じたユウカの羞恥心たるや、想像するに余りあるというものだろう。

「ねえ! ノアはどう思う!?!」

今にも火を噴きかねないほどに激怒するユウカの首が、右斜めに向けられる。

その視線の先にいた少女——セミナーの書記担当である生塩^{うしお}ノアは、ユウカと視線を合わせながら鷹揚に微笑んだ。

「そうですねえ。でもモモイさんたちは何も、ユウカちゃんが憎くてあんな物言いをしたわけじゃないと思いますよ? むしろその逆……ユウカちゃんのごことが大好きで、構ってもらいたいからこそあいつの棘^{とげ}のある言い方をしたんだと思いますが、どうでしょう?」

要は犬が主人に構って欲しくて悪戯をする原理と何ら変わらないだろう、とノアは説く。

一理ある説明に対し、しかしユウカは依然として不満げな表情のままだった。

「ていうか、ユウカ先輩……」

そしてユウカがノアに反論するより先に、別方向から気の抜けた声が響いてきた。

毛ほどもやる気を感じさせない、完全に弛緩^{しはん}しきった声。その声を吐き出したのは、セミナー所属の一年、黒崎コユキだった。

コユキは床の上に大の字に寝転がりながら、半目でユウカのことを睨みつけている。

「わざわざ私達のことを自分の部屋に集めて愚痴大会開くとか、勘弁してくださいよ……もしかして私、ユウ力先輩の愚痴を聞かされるためにだけに釈放されたんですか……？」

そう。ここは学生寮にあるユウ力の部屋だった。

そこで開催されていたのは、ユウ力がただひたすらに不平不満をぶちまけるだけの愚痴大会。

ノアとコユキはそれに一方的に巻き込まれたのである。

「何よ。何か文句あるの？ せつかく釈放してあげたつてのに」

「そりゃ反省部屋に一人でいるよりかは退屈じゃないかもしれないですけどおー……だからって何が悲しくて先輩の愚痴なんか訊かなくちゃいけないんですかあー……ユウ力先輩の言葉を借りるなら、それこそ生産性がないってものですよお」

ユウ力の愚痴大会に招集された二人。集められた二人の内、ノアは終始ユウ力の話を楽し気に訊いていた。

何故なら、大前提としてノアはユウ力のことが大好きだからだ。それに、彼女の困り顔すらも好んでいる傾向がある。よって、例え愚痴を聞かされるだけであろうがノアにとってこの催しは楽しむに値するだけの価値を宿していた。

しかし、コユキは違う。コユキは所謂、典型的な享楽主義者だ。

退屈を嫌い、常に楽しいことを追いつめて求めている彼女にとって、この陰鬱な愚痴大会は地獄そのものだろう。

そもそも、他人から愚痴を聞かされるということに快樂を見出せる人間の方が少ない。

ユウ力の日頃の心労を思えば、愚痴の十個や二十個出てくるのは不可抗力とも言えるが、コユキの言い分ももつともだった。

少なくとも、うら若き乙女三人が同じ空間に集まって開催する催しではないだろう。

ゆえにコユキは不満をあらわにする。

退屈で死んでしまいそうだと、でも言わんばかりに、トレードマークのツインテールを左右に振り乱した。

「ちょ、暴れないでよ、あんたの髪長いんだから！ 痛い、痛い痛い、ペチペチ当たってるんだけど！

ていうかそうよ！ 日頃の愚痴で言うなら、あんたにも色々溜まつてるんだから！ 毎回毎回面倒なトラブルばかり起こして……！」

コユキのツインテールによる地味な襲撃を鬱陶し気に払いながら、ユウ力は思いだしたように自身の後輩へ食って掛かる。

自らに向けられた敵意に、コユキは身体をビクつかせながら僅かに後退した。

「わーっ！？ や、やめましょうよ先輩！ 言い争いなんてしても不毛なだけですよ！ せつかくの女子会なんですから、もっと楽しい話しましょうよお！」

「……これって女子会だったの？」

「コユキへにじり寄っていたユウ力だったが、後輩の発した一言により毒気を抜かれたかのように静止する。

女子会。女子会と言ったのか、この後輩は？

今しがた彼女自身が口にしたように、ユウ力からしてみればこの集まりが女子会だとは欠片も意識していなかった。

女子会というのはもっと甘い雰囲気で行われているという先入観があったためだ。

ユウ力は確かめるようにノアがいる方向へ振り替える。視線があつたセミナーの書記担当は、一瞬思案するように人差し指を自身の頬に当てた。

そして、いつも通り泰然とした笑顔を浮かべながら発言する。

「そう定義しても差し支えないと思いますよ。女の子三人が、同じ部屋に寝間着姿でテーブルを囲んで、会話に花を咲かせている……コユキちゃんの言う通り、確かにこれは立派な女子会かもしれないですね」

ノアの話した通り、三人は今寝間着を着用していた。

時刻は夜の九時半。就寝の準備に取り掛かる時間帯である。

そんな時間に開催された愚痴大会。三人がそのような格好をしているも、なんら違和感はない……むしろ、自然だと言えた。

そして三人が座る真ん中には、丸テーブルが置かれている。その上にはティーカップが三つ行儀よく鎮座しており、中には琥珀色の液体が注がれていた。

紅茶である。無論、時間帯を考慮してカフェインレスのものだ。

上品な香り立つ紅茶の上には、輪切りにされたレモンが浮かび、爽やかな香りを放っていた。

確かに、この光景だけを見れば女子会そのものだと言言できるだろう。見目麗しい女子三人が、満月の浮かぶ夜、丸テーブルを囲みながら紅茶と歓談を楽しんでいる……

百人に訊ねれば、百人が女子会だと即答するような光景だ。

「うーん、ノアが言うなら否定はしないけど……言うほど姦^{かじま}しい集まりなのかしらね、私達って」

一通り毒を吐き出して落ち着きを取り戻したのだろう。ユウ力は肩の力を抜きながら丸テーブルに近づき、自らの衣服の皺を落とした。

そして荒んだ心を癒すかの如く、紅茶を一口喉の奥に流し込む。

紅茶特有の香りとレモンの酸味が、ささくれ立った気分を慰撫^{いぶ}してくれた。

「ふう、女三人寄れば姦^{かじま}しい、とも言います。それに当て嵌めるなら私達も三人ですし、該当していると思いますよ」

「そんな単純なものなのかしら」

「ユウ力ちゃんが考えすぎなんですよ。」

……それよりユウ力ちゃん。そのネグリジエ、可愛いですね」

と、その時。会話の流れを変えるように、ノアがユウ力の寝間着を指摘した。

ユウカが着ているのはワンピースタイプのネグリジエだった。色はネイビー。

半袖から覗く白い二の腕が、ネグリジエの濃紺のくろこんさを際立てている。

知的なユウカらしい、大人っぽくもあり可愛さも兼ね備えた寝間着と言えるだろう。

ノアの言葉を受け、ユウカの表情が今日一で和らぎ頬が緩んだ。

「ふふ、ありがと。そういうノアもオシャレ……ってどうか、大胆ね。

セクシーというかアダルティというか……同性ながら見てドキドキしちゃうわ」

「ふふふ。ありがとうございます」

対して、ノアが着ているのは黒色のベビードールだった。

ベビードールとは刺繍やレースが施された、腰丈ほどのランジェリーである。

まるで異国の姫のドレスを思わせるそれは、見た目が愛らしいのは言わずもがなだがやはり一番目を引くのは布面積の少なさだろう。

先ほど述べた通り腰までしか丈がないため、当然生足は惜しげもなく曝け出されており、袖もノンスリーブ。そのため、ふとした拍子に腋が見えてしまうのだが必定だった。

しかも生地まで薄いため、ともすると下着が見えてしまいそうだ。

ユウカは同じ女ながらも、そんな大胆な寝間着を纏うノアに少しドキドキしていた。

しかし、そんなユウカとは裏腹に、ノアは相も変らぬ余裕気な笑みを覗かせている。

「……それに比べてコユキ。あんたと来たら……」

ユウカはジト目を作りながら、未だ床の上に寝転がっているコユキへ視線を飛ばす。

色気のある格好をした二人に対して、コユキが着用しているのは白シャツとショートパンツというシンプルなものだった。

お世辞にも、色気のある格好とは言えない。というか、お洒落に気遣うであろう年頃の娘がしているドレスコードでは断じてないだろう。

しかし、そんなことはどうでもいいと考えているのか、そもそも思考の外なのか。ユウカとノアの会話を聞いていたコユキが急に勢いづけて上体を起こした。

先のやる気が剥落はくらくした両目から一転。その瞳の中には、眩いほどの星が煌いていた。

「そうですよ！ 女子会といったらまさしくこういう会話です！」

「……は、はあ？ どうしたのよコユキ。急に水を得た魚みたいに生き生きと……」

「さっきまで先輩たちがしてたような会話ですよ！ パジャマが可愛いとか、紅茶美味しいね、とか！ そういう乙女らしい歓談を楽しみましょうよ！」

それこそが、正しい女子会の在り方ってものです！」

両手を握りしめながら、熱い弁舌を振るうコユキ。言外に、愚痴大会などやっている場合ではないぞと、その輝く面相が告げていた。

「……いや、だからねコユキ。これは楽しい女子会っていうわけじゃなくて……そもそも目的の一つには、あなたへの説教も——」

「女子会の定番と言えば恋バナ！　そうですよ——！　恋バナしましょうよ恋バナ——！」

風向きが悪くなりそうだと悟ったのだろう。コユキは今まで以上に声量を張り上げたかと思うと、ユウ力の台詞を無理矢理に断ち切った。

「ね、ノア先輩——！　ノア先輩も恋バナ、したいですよね——！」

そしてこの場における主導権を握るためだろう。話の予先を、優雅に紅茶を飲んでいたノアに向けた。

ノアを味方に付けてしまえば、話の流れが完全に恋バナに傾かざるを得ないと踏んだのだ。

しかし、何もコユキは、ユウ力の愚痴大会を中断させるためだけに恋バナを提案したわけではない。

前述した通り、コユキは常に楽しいことを追いつめている享楽主義者だ。それが原動力で動いていると言っても過言ではない。

ゆえにコユキは、ここで恋バナをしたほうが面白い展開になると思ったのだ。だから恋バナを提案した。

まだ見ぬ楽しい景色を一望するために。

「そうですねえ。こうして三人集まったわけですし、せっかくなら普段しないような会話をするのも乙かもしれませんね」

「ちょ、ちよつとノア——？」

まさかコユキに賛同するとは思っていなかったのか、ユウ力が焦ったような声を上げる。

しかし、何も不思議なことではない。ノアもコユキほどではないにしろ、享楽主義者の一面がある。特に、ユウ力が絡んだ時は顕著なほどに、その一面が遺憾なく発揮されるのだった。

ということはつまり、ノアはこの流れにユウ力も巻き込もうとしているのは明白で……

「個人的に、ユウ力ちゃんの好きな人とか気になるところですね♡」

本日一番の笑顔を浮かべながら、とんでもない爆弾を投下した。

その発言がされるや否や、ユウ力は「なっ——？」と顔を赤らめながら動揺を露わにする。

「あつ、それ私も気になります——！　ねえユウ力先輩、今好きな人っているんですか？　私達にだけ教えてくださいよ——♡」

そしてその隙を見逃すほど、享楽の探究者・黒崎コユキの瞳は曇っていない。すぐさまノアの発言に便乗し、ユウ力へ追撃を仕掛けていく。

ユウカは一斉に二人から矛を向けられた影響からか、それとも羞恥心からか。未だ両頬を真っ赤に染めながら、言葉を失ったように唇をヒクつかせていた。

「誰でしょうね？ モモイちゃんやアリスちゃんといったゲーム開発部の可能性が個人的には高いと思うんですが、ノア先輩はどう思います？」

「確かに、その可能性は高いかもですね。曰頃からユウカちゃんとかかわりが多いのも、ゲーム開発部の皆さんですし」

「私はレスじゃないわよッ！？」

瞬間、絶句していたユウカから怒号が響き渡った。勝手に同性愛者にされたことへ憤りを覚えたのだろう。

その反応を見て、コユキの口角がいやらしく持ち上がる。

「馬脚を露わしましたねユウカ先輩！ 先輩が女の子好きということでないのなら答えは必然、一人に絞られますー！」

「つまりユウカちゃんが好きなのは、“先生”ということになりますね♡」

「……っ！」

ユウカが再び言葉を失った。それも、先ほど以上に顔を真っ赤に染めながら。

待てど暮らせど彼女の唇から言葉が紡がれることはなかったが、その反応がまさしく答えだろう。

ノアは片手を頬に当てながら微笑するように。そしてコユキは小悪魔のような笑顔が爆発させた。

「にーっはっはっは！ なるほどなるほど？ ユウカ先輩は、先生のことがだいすきなんですね？ でも確かに言われてみれば、先輩って先生と話す時声がワントーン高くなりますもんねえ？」

「ち、ちがつ……！ そ、そんな訳ないじゃない！ 適当なこと言わないで！ わ、私が先生のことを好きだなんて……！」

せ、先生はその、あ、あくまで尊敬している大人っただけ！ 異性の対象として見たことは一度もないわー！」

目の中を渦巻き状に回しながら、ユウカは遅すぎる否定の言葉を口にする。

そのような言葉、今更幾ら並べたところで逆効果だろう。

実際、ノアとコユキの笑顔はより深いものになっていた。

「ですって、ノア先輩。どう思います？」

パニクるユウカを尻目に、コユキはニヤニヤとした表情でノアに目配せする。

「うーん。ユウカちゃんは素直じゃないですねえ♡」

それに対しノアは、手のかかる生徒を微笑ましく見守る教師のような表情を浮かべていた。

しかし若干、その顔色の中に悪戯気な色彩が混じっている。

それを敏感に感じ取ったコユキは、ノアに負けなくらいの小悪魔な笑みを刻んだ。

「ねえ、ユウカ先輩♡ 先生のこと好きなんでしょう？ 素直に認めちゃいましょうよ♡」

「大丈夫ですよ、ユウカちゃん♡ ここには私達しかいませんから、素直な本音を吐き出してください♡」

「だ、だから違うってば！ 二人ともいい加減なこと言わないで！ 怒るわよ！？」

もはや答えは分かり切っているというのに、それでもユウカは強情だった。

先生への恋心を否定し、二人の言葉を頭ごなしにつっぱねる。

「そうですか。先輩、この期に及んでもまだ否定するんですね？」

「ひ、否定も何も、私は事実を言っているだけよ！ 妄言も大概にしない、コユキ！」

「そうですかそうですか……ユウカ先輩がそんな態度を取り続けるのであれば……ねえ、ノア先輩？」

「ふふ♡ そうですねえ♡ 心苦しいですけど、こちらが強硬手段を取るしかないみたい……ですね♡」

「……え？ な、なにになに？ な、何で二人とも近づいてくるの……！？」

一瞬のアイコンタクトをすると、コユキとノアは妖しい微笑を浮かべながらユウカへとにじり寄った。

ただならぬ気配を感じたユウカは怯えながら後ずさろうとするが……

「にははは！ ノア先輩、今ですっ！」

「ふふ♡ ユウカちゃん、覚悟してくださいね！」

「ええっ！？ やっ、ちょ、きゃあああ——！？」

コユキの号令を皮切りに、二人は一斉にユウカへと飛び掛かった。そして左右からそれぞれユウカの腕に抱き着くように密着すると――

「「「ちょちょちょちょちょー！♡」」」

ユウカの両腋へ、同時に指を滑らせた。

「ひゃああっ！？ ひゃっ、あはっ、あははははははっ！？」

腋の下から這い上がってくるくすぐったい感触に、ユウカは思わず笑い声を吐きだした。

考えるより先に、横隔膜が震え出す。喉の奥から、勝手に甲高い声が飛び出していった。

そして自身の腋の下にノアとコユキが指を突っ込んでいるのだと知覚して、自分は今くすぐられているのだとようやく気付く。

「ちよつ、まつ、待つて待つて待つて! ? な、なんで! ? 何で急にくすぐつ、んひやつ! ? ひやはつ、ひやあつひやひやはははははつ! ? 」

無理矢理開帳させられた腋の下へ、二人の計十本の指が無遠慮に、そして休みなく這いずり回る。

ユウカは、先よりもどこか熱っぽい吐息を溢しながらノアの指使いに翻弄された。

その両頬も、甘い熱を宿して徐々に火照っていく。

「んひゃひゃははははっ！？ だっ、だめっ、だめえっ……！ ノ、ノアっ、ほんとにやめっ、ひゃっ、ひゃはっ、くすぐったすぎてっ、おかしくなりゅうっ……！」

「おおっ……！ ユウカ先輩、凄い悶えようですね♡ じゃあ私も、スカーツの中失礼しまーす♡」

激烈な反応を見て興味をそられたのか、コユキもノアにならってユウカの太ももを責め立てようと指を滑らせていく。

しかし、その間際。それだけは絶対にやらせるものかと、ユウカの潤んだ瞳が鋭くキツと細められた。

「あんたは触るなあアア……！」

「——げふッ！？」

瞬間、硝子^{がらす}を割ったかのような雄叫びが室内へ爆発。それと同時に、ユウカの繰り出した頭突きがコユキの額に炸裂していた。

その一瞬、コユキによる拘束が緩んだ隙を突いてユウカはノアの抱擁も引っぱがす。

「あん、ユウカちゃんあん」という名残惜しそうな声が真横から飛んできたが、気にせず脱出。

立ち上がると同時、床の上で痛みに呻いているコユキの片足を無造作に持ち上げた。

「いだあああいいいいっ……！！ な、何するんですかあ、ユウカせんぱあああ……頭突きなんて泥臭い技、女子力の欠片もないですよおおっ……」

「はあ……はあ……うるさいわね……なりふり構ってられなかったのよ……！ それよりコユキ……？ あんた、よくもまあ人の身体を遠慮なくこちよこちよこちよくすぐてくれたわね……？」

コユキの片足を持ち上げたユウカから、洒落にならないほどの怒気が噴出していった。

語るまでもなく、先ほどの辱めに対しコユキへ恨みを抱いているのだろう。

そんな鬼気迫るユウカの姿を見て、コユキは額を押さえながら恐怖に慄き「ひっ」と短い悲鳴を漏らした。

「ぼっ、暴力反対です先輩！ これは女子会なんですから！ さっきのも乙女同士のじゃれ合い、たかがじゃれ合いですよ！ 怒らないでくださいあい！」

「……なるほど。暴力はよくないけど、じゃれ合いなら問題ない。それがあなたの言い分なのね、コユキ？」

「そ、その通りですよ！ だからユウカ先輩、このことは先輩の広い懷で水に流して……」

「それなら」

と、瞬間。ユウカはコユキの言葉を断ち切るように声を発した。

その声からは有無を言わせぬような圧力が籠められており、さしものコ
ユキも思わず口を噤んでしまう。

「私が今からコユキにすることもじゃれ合いだから、何も問題ないわよね——？」

そしてユウカは、自らが持ち上げたコユキの片足を、自らの腋に挟み込んで固定した。

そのまま、動けなくなったコユキの足の裏へ自らの指先を持つてくる。

それだけで、今から自分が何をされてしまうのか、コユキは嫌というほど理解した。

「やああ——ッ!? ちよ、ユウカ先輩っ、まっ——」

「♡！——」

「——ふひゃあぁっ!？ ふひゃっ!？ いひゃあぁっひゃっひゃっひゃひゃははははははっ!?!？ いひっ、いひいひっひひひひひっ!?!？」

制止の言葉を放つも遅く、コユキはユウ力に足の裏をくすぐられ笑い悶えた。

報復開始。ユウ力の逆襲の幕開けである。

「いひゃああつひやつひやはははははっ！……？　せ、せんぱつ、やめつ、ひひやつ、あつひやつひやつひやつひやつひやつひやつ！……？　ちよ、無理無理無理無理っ！！　ひーっ！！　ひいいっひっひっひっひっひっひっ！！」

「何よ？ これは女の子同士の可愛いじゃれ合いなんですよ？ だったらあんたも存分に楽しみなさいよ♡ ほら、ほらほらほら♡ こちよこちよこちよ♡」

「ひやあああつひやつひやつひやつひやははははつ……？　むりつ、むりむりむりいいいいつひつひつひつひつひいいいつ……？　わ、私がくすぐられるのは、聞いてなつ、ひやひいいいつひつひひひいいいつ……？」

ユウカは固定したコユキの足の裏へ、しつこく指を這わせ続ける。

コユキの足の裏は驚くほどに小さく、その分外部からの刺激に対して敏感なようであつた。

その肌の滑らかさも相まって、赤子のような足裏である。

これはくすぐり甲斐がある、とユウ力の中の嗜虐心が燃え上がった。

「やだあああつひやつひやつひやははははっ！ー？ くすっ、くすぐつたあつひやつひやははははっ！ー？ ひいいっ、ひいいいっ！ー」

「ちよ、いたっ！ 危ない！ ジタバタ暴れないでコユキ！」

片足しか固定していない影響で、拘束していない方の足で横腹をゲシゲシと蹴られるユウ力。

このままだとくすぐり刑を続行するのに支障をきたしてしまう。となれば、もう片方の足も拘束する以外の選択肢はない。

「ノア、協力して！」

今の今まで静観に徹していたノアだったが、ユウカの一声を受けて優雅に立ち上がる。

そしてユウ力にならうように、苦も無くバタバタと動き回るコユキの片足を捕捉した。

腋に挟み込み固定すると、そのしなやかな指先をコユキの足裏にあてが
つて――

[illegible]

体表を撫で上げるように、まばらに指を動かし始めた。

もう片方の足裏から這い上がってくるくすぐったさに、コユキは笑い声のボリリュームを大きくする。

「のっ、ノア先輩までっ!？ なっ、何ですかあああっひゃっひゃっひゃっひゃはははははっ!？ さ、さっきまでっ、ひゃひっ、い、一緒にユウ先輩のことっ、ひいっひいっひいっ!？ くすぐったのにいいいいっ!」

「ごめんなさいコユキちゃん♡ 私はいつでもユウカちゃんの味方ですし……それに、コユキちゃんがもっと日頃の行いを反省したほうがいいとい

「にやあああああつ、この裏切り者おおオオツ！」

ふひやつ!？ ふやあああつひやつひやつひやつひやはははは
つ!？ ノアせんぱつ、そこつ、だめえええええつへっへっへええええ
つ!？

くすぐつたひいいっひひひひひいゝゝっ!？」

ノアはコユキの足裏の中でも、特に指の付け根付近を重点的に愛撫していた。

そこは足裏の中でも特に、日頃から他人に触られる機会が少ない場所だ。人に触られる機会がないということは、それだけ触れられる刺激に慣れていないということ。

コユキは今までに感じたことがないほどの莫大な質量のくすぐったさに身悶えした。

「あらコユキ。ノアのくすぐりにばかり夢中になって……私の方はくすぐすくすくしないってことかしら？ 随分と舐められたものね？ こちよこちよこちよこちよっ！♡」

「――ひぎいいいっ!？ いひいいいっひっひっひっひいいいいっ! ゆ、ユウカせんぱつ、ひひゃあぁっ!？ つ、土踏まずっ、か、カリカリ引っ搔かないでええええっひゃあぁぁっひゃっひゃっひゃひゃひゃはははははははっ!?!？」

そしてノアとは対称的なくすぐり捌きを披露したのはユウカだった。

ああ、ダメだ。これ以上同じところばかりくすぐられてしまったら……イケナイものがきてしまう。

もはやそれはすぐそこまで……具体的に言うと、下腹部の奥から湧き上がっていた。

「せつ、せんぱいたちほんとうにすとつぷですうううっ！　これ以上はつ、にやはつつ、んにゃひゃひゃひゃつ、これ以上は私い——」

「何よ。くすぐったすぎて笑い死ぬ、とでも言うつもり？　安心しなさい、人はそんな簡単に死なな——」

「——おしつこ漏れちゃいますうううっ！——」

「……はあっ！？」

「あらあら」

「コユキが今しがた放った一言。その意味をしばらく理解しかねて放心していた二人だったが、咀嚼を終えると弾かれたようにコユキの両足を解放した。」

そう。コユキがこれはイケナイと感じていた衝動は尿意だった。

まあ、ずっとくすぐられていたら膀胱が刺激されてしまうのも無理なきこと。むしろ必然と言えるだろう。

二人は尿意を訴えたコユキから距離を取るように後ずさった。

必然、その瞬間二人には隙が発生した。その間隙かんげきを穿つように、コユキの猫のような瞳が光を灯す。

「今だああア——ッ！」

「えっ、きゃああっ！？」

そして浮かべた眼光そのままに、猫のように躍動したコユキがノアへと飛び掛かり地べたへと押し倒す。

その衝撃で、丸テーブルに置かれた三つのティーカップが振動した。琥珀色の液体がカップから吐き出され、僅かにカーペットの上にシミを作る。

しかし、そんなこともお構いなしにコユキはノアを組み伏しながら馬乗りの態勢を陣取った。

そして——

「今度はノア先輩の番です！　こちょこちょこちょ——！」

「えっ、ひゃああっ！？　あっ、あはっ、ひゃはははははっ！？」

コユキは勢いのままにノアの腋の下に手を突っ込むと、そのままフキフキと指先を蠕動ぜんどうさせた。

瞬間、稲妻に打たれたかのようにノアの身体が震えあがる。同時、彼女の小さな口から津波となって笑い声が溢れ返った。

「あはっ、ひゃああんっ！ んふっ、くふふふっ……！」「コユキちゃっ、だ、だめっ……わ、わきっ、さわらないでっ、ひゃふっ、んふううっ！」

ノアは「コユキの指先に悶えながら、どこか悩まし気な声を漏らしていた。先のユウ力と「コユキよりも、くすぐりに対し敏感に反応しているように見える。」

しかし、それも無理ないことだろう。何せノアの寝間着は、三人の中で最も肌の露出が多い。

肌の露出が多いということは、その分外部からの刺激に対して脆弱であるということ。転じて、防御力が著しく低いのだ。

ましてや、肌を擦過^{さっか}して効力を発揮するくすぐりにおいてはより顕著だと言える。

「につはっはー！ この中でまだくすぐられてないのはノア先輩だけ……自分だけ難を逃れようたって、そうはいかないんですからあー！ 食らえー！」「ちよちよちよちよちよちよー！」

「ひゃっ！？ あはっ、だっ、だめ「コユキちゃっ、そ、そんな激しくくすぐらないでええっ！？」 ひゃふっ、んふうっ、んふううっふふふふっ……！」「

だが、そんなノアの防御不利を、当然「コユキは斟酌^{しんしやく}しない。

むしろ普段怖くて逆らえない先輩に一泡吹かせるチャンスだと気をよくしながら、ノアの腋の下を激しくまさぐった。

腋^{くぼ}の中でも特に窪んだ場所、溝^{みぞ}を目掛けて左右の指を殺到させてくすぐり倒していく。

指が動くたびに、ノアの四肢が悩まし気に跳ね上がった。

「ふふふ……甘いわね「コユキ。ノアの弱点はねー……」

「コユキのくすぐりに乱れている最中、気付けばユウ力がノアの頭上に腰かけていた。

「コユキの指先に狂わされているノアを、蒼玉の瞳で覗き込みながら、指先を妖しく動かして接近させてくる。

果たして、冷酷な算術使いが狙いを定めた場所は――

「♡♡♡ 首筋よ♡」「ちよちよちよちよ♡♡♡」

「――ひゃああっ！？ んんっ！？ だっ、だめっ、ユウ力ちゃっ、そこだけ……んんんっ、んふううっ、くふうううう……っ！？」

ユウ力の十本の指が首筋に触れた瞬間、ノアの反応が劇的に変化した。

その淡雪^{あわゆき}の如き白い肌は苺のシロップをかけたかのように真っ赤に染まり、絶え間なく全身がブルブルと痙攣する。

のみならず、まるでユウ力の指を払うように首を左右に振り乱し始めた。まるで駄々をこねる赤ちゃんのような仕草だ。

普段泰然として余裕気な態度を崩さないノア。そんな彼女がこれほどまでに取り乱す様を始めて目の当たりにした「コユキは、しばしの間その様相を呆然と見つめていた。

そして二人の拘束から脱出したノアは、コユキのことを押し倒すとそのままくすぐり刑を敢行した。^{かんじょう}

仕返しのもりなのか、喉元に十本の指を密着させてくすぐり回している。

コユキは、甲高い絶叫を上げながら笑い悶えた。

当然のようにそこへユウカも加わり、コユキの絶叫の度合いは一段跳ね上がる。

それからしばらくコユキをくすぐっていると、ふとした瞬間に脱出。

次に餌食になったのはユウカだった。

そして数分ユウカがくすぐられると、次はノア。次はコユキ。次はユウカでそのまた次はノア。次は、次は、次は次は……と。

それからしばらくの間、その部屋の中は三人分の姦しい笑い声が重なって響き合うのだった。

「はあぁ……もう、限界……」

「私も……明日、指とお腹が筋肉痛になっていそうです……」

「ぜえ……ぜえ……ぜええっ……ね、ねえ先輩……な、なんか……私だけ五回くらい多くくすぐられてませんでしたか……?」

そしてやがて、体力が尽きた三人は汗だくになりながら床の上に寝そべった。

並んで横になる姿は、見事に川の字を描いている。彼女たちの仲の良さを象徴しているようだった。

やがて三人は呼吸を整え一息つくと、まるで示し合わせたかのように目を合わせた。そして、弾かれたように笑い出す。

口にはしなくても、三人とも心の中で「楽しかった」と言ったのがその表情から理解できた。

やがてその空間に、静かな寝息が聞こえだす。沢山じゃれて騒いで笑って、疲れたのだろう。

少女たちはお互いを抱き合うように寄り添いながら、深い眠りにつくのがあった。

夢の中でも、また三人で遊べますように、と。
そんな少女らしい、青い願いを抱きながら……

眠りに落ちた三人の顔は、とても安らかで——青春色の微笑みに、満ちているのだった。

マツサージと称してムツキがアルをこちよこち

よくすぐり倒すお話

イチシキ太郎

便利屋68とは。

超巨大学園都市キヴォトス広しといえど、その名を知らぬものは居ない。あらゆる仕事を請け負う組織。

所属する四人のメンバーは、あまりの恐ろしさからあらゆる学園から一目置かれる存在となっている。

「……っていう名乗りはどう、ムツキ？ これならアウトローっぽくて、きつと依頼主も頭を垂れるに違いないわ！」

「いいんじゃない？ アルちゃんらしさが出てると思うよー」

「じゃ、決定ね。あとでハルカとカヨコにも共有しましょ」

「賛成ー」

と、無駄に高級そうなオフィスチェアに座って目をキラキラさせながら言うアルと、「はいはい、いつものヤツね」と言わんばかりに面白がつて賛同するムツキ。

二人はキヴォトス屈指のマンモス校「ゲヘナ学園」に通っている生徒だ。

現在外出中の「カヨコ」と「ハルカ」を含めた四人で、「便利屋68」という団体として活動している。

このキヴォトスでは、それぞれの学園内で様々な部活動が立ち上げられている。便利屋68も、その一種であった。

しかし現在は、様々な出来事があったゲヘナ学園を取り仕切る「風紀委員会」と対立して学外にオフィスを構えての活動を余儀なくされている。

ここまで聞くと、さぞかし悪名高い実力者集団のようにも思えるが、実際は食うに困るほどの極貧生活を送っている始末である。

少なくとも、HDBの事務所の家賃を満足に払えるほどの財力は持ち合わせていない。

シャーレの「先生」から斡旋される仕事や、自分たちでなんとか見つけた依頼をこなして日銭を稼ぐ毎日に奔走されていた。

要するに、貧乏であった。

人数に見合わない広さの事務所や無駄に見栄えのいい家具を揃えている自業自得な一面もあるのだが。

それでも働きづめでは身も心も持たないため、各々は適度に休みの日を設けている。

昼下がりの現在、アルとムツキが何をするでもなくダラダラと過ごしているのは、たまたま休みの日が重なったからである。

長く伸ばした髪をバサツとかき上げ、決めポーズらしい何かを繰り返しているアル。

そんな彼女を傍らで見つめていたムツキは、あることに気づいた。

「アルちゃん。なんか疲れてる？」

ムツキがそう言うと、アルはポーズを取るのをやめてムツキに向き直る。

「……そうかしら？」

しかし、妙に強がった態度でそう答えるアル。

ムツキはそんなアルに対し、どこか呆れたような顔をしながら言う。「んー、無理しなくていいよー？ ここには私とアルちゃんしか居ないしいい」

「……別に、無理なんてしてないわ」

そう言いながらも、疲れが顔に出ていたのだろうと思い返しながら釈明するアル。しかしムツキは、ため息をつきながらも首を横に振る。

「その証拠に、首と肩。さつきからずっと凝ってそうだよお？」

「……っ！」

ムツキに指摘されたアルは、ビクツと肩を震わせる。どうやら凶星であるらしい。

気丈に振舞おうとするアルだったが、体を動かすたびに怪訝な顔を浮かべる。どうにも本調子ではない自分に気づいたようだ。

「今日はもう休みなよー？」

「だから休んでいるじゃない。だから今日は何にも依頼を入れずにゆつくりしているわ」

「……じゃあ、そこに置いてある連絡リストは何なのかなー？」

「！？」

ムツキの指摘に、アルは慌てて視線を逸らした。そこに置いてある連絡リストには、細かな文字でびっしりと名前と電話番号が書かれている。

「らしくないことするじゃん。最近、みんな別々で依頼を受けましょって言ったのはそういうこと？」

「……」

アルは沈黙を貫いているが、それは無言の肯定を表していた。ムツキはそんなアルを、どこか優し気な目で見つめる。

これまでの便利屋68は皆で固まって依頼を受託していたが、ここしばらくの間は四人別々で行動していた。

アルが残りの三人に仕事を振り分け、効率的に活動資金を稼ぐために。

その依頼はどこからやって来るのか？

それはアルの地道な努力によるものであった。

日々、彼女が依頼を見つけてくるため街を練り歩いた成果もあって、ここ最近の便利屋68には仕事が絶えない。

自身の仕事と並行して依頼を見つけて営業活動に奔走し、依頼者とのアポイントや交渉を行っていた。

人より多く働いていたアルが身も体を酷使してきたのは、ムツキの目に見ても明らかであった。

「ねえアルちゃん。無理しすぎだよー」

アルは目を逸らせながら反論する。

「無理なんてしてないわ」

「はいはい。無理してる人間は決まってそう言うー♪」

強がりに対し、ムツキはおちよくるようにそう答えた。

流星は幼馴染。付き合いの長さの前では隠し事はできない。

アルはどうとう観念した。

「……そうよ。無理してるわよ。悪い？」

「んもお、開き直り早いんだからあ」

どこか不貞腐れたような顔をするアルに、ムツキは笑みを向ける。

「アルちゃんってホント、変なところで不器用だよねえ？」

からかうようにそう言われるが、ムツキから向けられる視線は暖かくて優しくかった。思わず安心感を覚えるアルは、素直な気持ちを吐露する。

「だって……カヨコやハルカだけに仕事させるわけにはいかないじゃない。もちろんムツキ、あんたにもね」

陸八魔アルという少女は、普段は悪ぶったような態度を貫いているが根は優しい仲間想いの少女であった。

自分について来てくれる「カヨコ」「ハルカ」そして「ムツキ」はかけがえのない存在だ。

だからこそ、彼女たちが頑張ってくれるなら、自分も負けじと頑張らねばならない。

そう考えていた。しかし、そんなアルの心情を見抜いているムツキは意味ありげな笑みを見せる。

「でもさ？ 根を詰めすぎて倒れでもしたら、本末転倒だよ？」

ムツキから正論で返されるアルは一瞬言葉を詰まらせるが、それでも反論する。

「……じゃあ、どうしたらいいの？」

「うーん、そうだなあ」

しばし思索するムツキ。

すると妙案が浮かんだのか、

「私はともかく、二人に疲れているところを見せなければいいんじゃないかな？」

ポンと手を打った。

「というと？」

「簡単なハナシ。このムツキちゃんが、アルちゃんの疲れを取って差し上げます！」

「……は？」

そう言って、ムツキはアルの背後に寄り肩に手を置く。そして、マッサージを開始した。

「ちょ、ちよつと！？」

もみもみ……

ごりごり……

突然のことに驚くアルだったが、ムツキの指圧が思いのほか気持ち良く抵抗する気が失せてしまう。

「どう？ 気持ちいい？」

「まあ……悪くはないわね」

アルは素直に答えると、ムツキはさらに指圧を続ける。すると今度は別の感覚が押し寄せてきたため、思わず声を上げる。

「ひやつ！？」

「お、ここ気持ちいいんだ？」

アルが声を上げた部位は、首だった。ムツキは的確にツボを刺激してきたため、つい声が出てしまったのだ。

そんなアルの反応を見て、ムツキはさらに指圧を続ける。

「も、もう十分よ！」

「遠慮しなくてもいいんだよ？」

「でも……」

「いつも頑張っているアルちゃんへのご褒美なんだし♪」

まるで自分のことのように喜びながら施術するムツキに対し、アルは苦笑するしかなかった。

どうやら逆らえないらしいと諦めたのか、アルはムツキに身を委ねることにした。

そしてしばらくの間、ムツキによるマッサージが続いた。

「あ……ふあつ……！ はっ、やつ……！ あ……！」

ムツキの指使いに思わず声が出てしまうアル。

心地の良い、痛気持ち良さが首肩を中心に駆け巡る。

「ん……んっ！」

思わず身を振り、甘い吐息が漏れてしまう。

「……っ！ ふう……案外、あ……上手いじゃない」

アルの口から発せられる声はどこか煽情的で、反応がいちいち艶めかしい。

凝りが解されていき確かに心地が良い。

しかし、それと同時にどうにもくすぐったいような感覚が走る。

「ひゃっ！」

「ふ、ふふふ……！ ふざけ、ないでえ！ えへ、えへへへ……！ そんなこ……ひやああああんっ！？」

反論しようとした瞬間、ムツキは再び耳に息を吹きかけた。ゾワリとした感覚に襲われて言葉が途切れてしまう。そしてムツキはそのまま舌先を這わせ続ける。

ピチャツという音が直接脳内にまで響きわたるようで、アルは頭がおかしくなりそうになっていた。

(やばっ……これ……!)

そんなアルの心情を知ったうえでムツキは、今度は耳たぶを甘噛みし始めた。

同時に脇腹への刺激がリズムカルに加えられると、アルの口からより一層の大きな悲鳴が上がった。

「ふああああっ!? あはっあああはっはっはっはははははは!」

笑い声と悲鳴が入り混じった奇妙な声が口から漏れ出る。そんなアルの反応を楽しむかのようにムツキは執拗に耳を舐め続ける。アルは身を振らせながらも何とか耐えようとするのだが、ムツキの執拗な攻撃の前に為す術もなく翻弄されるしかなかった。

ついに限界が訪れようとしていた。

その時だった。

「ただいま帰りましたー」

「ただいま」

事務所の扉が開いた音がするのと同時に、二人の少女の声飛び込んできた。

その瞬間、ムツキはアルの耳から口を離し、脇腹を責め立てるのを止めた。

「はあっ……はあ……?」

突然の解放感にアルは呆けたような表情になる。

反対に、ムツキは声のした方向に目をやりながら悪戯っぽい笑みを浮かべてポツリと呟いた。

「……ざーんねん。もう終わりかあ」

終わり。

その言葉を受けて、耳と脇腹への責め苦が終了を迎えたのだと再認識した。

助かったと思いきや安堵するアルだったが、ムツキはそんな様子などお構いなく再び耳元に顔を寄せて囁いてきた。

「残念でした、アルちゃん♪」

「……!」

その言葉に、アルは思わずゾクツとした。

「せっかく楽しかったのねー? 残念だなあー、ホント♪」

「っ……!」

アルの顔が真っ赤に染まる。

「またチャンスがあつたらやってあげるからねえ、くふふふー♪」

「だ、黙りなさい……!」

そんな会話を交わしながら、ムツキは社長室を出ていった。

何事も無かったかのように、帰ってきた「カヨコ」と「ハルカ」を出迎えに行った。

半ドアの向こうから三人の話し声が聞こえてくる。「アル様は?」「ん

ー、社長室にいるよ?」「そうなんだ。何かしてたの?」「別に何もー?」

とムツキは終始すつとぼけていた。

ちなみにこの部屋は、社長であるアル専用の社長室だ。扉の向こうは入り口側で、応接間とオフィススペースがある。

ゆえに、羞恥で顔を真っ赤に染めたアルの姿は誰にも見られることは無かった。

それだけが、アルにとっての不幸中の幸いであった。

ムツキにされた耳責めと脇腹への刺激の余韻がまだ残っている中で、アルはぼんやりと考えていた。

「はあ……」

アルは呼吸を整えながら、必死に冷静さを取り戻す。

（ムツキってば、どうして急にあんなことを……？）

アルは困惑していた。

何故、ムツキが自分に耳舐めと脇腹責めを仕掛けてきたのか。その理由が分からなかったのだ。

ただの悪戯と言ってしまうえばそれまでだが、それでも同性の幼馴染相手にする行為としてはいささか過激すぎるようにも思える。

「……わっかんないわね」

うんうん唸りながら独りごちた。

結局、その答えが分からず仕舞いのまま、アルは天井を見上げるしかないのであった。

★

「……あつぶなかつたあ。いやあ、二人が帰ってきてくれて良かったかも。でなきや、私もアルちゃんもどうなってたことか。はあ、アルちゃんってばどうしてあんなに可愛い反応してくれるんだろう？ ホント、たまらないなあ。ちよつとやりすぎちゃったかなって思うけど……きつと、アルちゃんも満更じゃないよね？ 仕方ないよね？ だってアルちゃん可愛いすぎるんだもん。あんなの我慢しろっていう方が無理な話だよ。でも、アルちゃんは自覚してないんだろなあ。自分がどれだけ可愛いかってこと。ホント、そういうところが罪作りだよねー？ でもでも、そんな所も好きだよ♪ さてさて、次の休みはいつになることやら……楽しみだなあ……我慢できるかなあ……くふっ、くふふ……！」

SRT式強化尋問演習

「通過儀礼のくすぐり拷問」

なな☆だま

SRT特殊学園——連邦生徒会の直面する特殊な危機に備えるべく、最高の能力を持つ生徒たちを集めて作られた学園。後に、連邦生徒会長の失踪に伴い、学園解体の危機に直面するが、この話はそれより少し前の物語。

SRTには、不思議な慣習がいくつもある。肝試しと称して本当に戦闘能力を試したり、キャンプと称して食べられる野草だけで炊き出しをしたりといったものだ。その中でも、「強化尋問演習」というイベントが、代々、SRTの1年生に畏怖をもって伝えられてきた。それは、上級生が1年生に用意する通過儀礼とだけ知られていた。

ある日の夜、SRTの1年生、RABBIT小隊の隊長である月雪ミヤコは、3年生のFOX小隊の居室に呼び出されていた。サキやモエ、ミヤコと同室のミュは、一人ずつ先に入室していたらしい。

「強化尋問演習へのお誘い」

大仰な名前に反して、この演習はSRTの正式なカリキュラムではなく、要するに拷問訓練で、先輩からのしごきがあることをミヤコは理解していた。

水着を着用の上で来てくれ、というのも、ミヤコはなにか怪しく感じていた。濡れる可能性のある拷問というと、ウォーターボーディングなんかを体験することになるのかと考える。先輩直々の洗礼に緊張

しながら、呼び出された部屋に近づく。すると、そんな雰囲気とは場違いな笑い声が響いてきた。

「ぎやはははははは、やめ、やめっ、あはははははははっ!!」

間違いない、これはサキの笑い声だ。ミヤコより少し前に呼び出されていた彼女が、大きな声……笑い声? をあげていた。どう聞いても痛めつけられているときの声には聞こえず、ミヤコは状況が理解できない。

しばらく耳を澄ましていると、よく通るサキの声に混ざって、FOX小隊の先輩たちの声がかすかに聞こえてきた。

「サキが弱いところはここなの? 隠そうとしたって無駄よ!」

「先輩にそんな口きいていいのかな? それともこのモミモミが気に入った?」

クルミとオトギの声だ。これは、サキを……くすぐってるように聞こえた。

「腋、閉じられなくてつらい? こちよこちよされるのつらいよね」

「足裏は逃げられないからな、ブラシをじっくり味わえ」

「うわっはっはっはっ、ゆるひへっ! あははははははっ!!」

ニコとユキノの声が聞こえた直後に、サキの悲鳴が甲高くなった。サキが受けているのは、FOX小隊の4人がかりのくすぐりだと、ミヤコは理解した。

その後は、サキの狂ったような笑い声、許しを乞う叫びがしばらく聞こえ続けていた。

ミヤコはそんな室内の様子を聞くことに集中しすぎていて、急に扉が開かれたことに驚いてしまった。

「ミヤコか」

急に現れたユキノの姿に、ミヤコの心臓が早鐘を打つ。

「まだ呼び出した時間には早い、自室で待機せよ」

それ以上の情報収集はかなわず、一度引き返すことになった。

それから一時間後、ミヤコは再びFOX小隊の居室にいた。

「どうやら盗み聞きしていたみたいだが、これはくすぐり拷問に耐える訓練だ」

SRTの中でも最高学年のエリート小隊のリーダーとして、ユキノが威厳たつぷりに言う。ただ、その内容はにわかには信じがたいものだった。

「ミヤコちゃんはまだ知らないかもしれないけど、最近は痛かったり苦しい拷問だけじゃなくて、屈辱を感じさせるタイプの尋問も増えるんだよ」

「まあ、くすぐりの恐ろしさは一度知っておいた方がいいかもね。私たちも経験してるしねえ」

「だからこうやって、先輩から後輩であるあなたたちに、非公式なカリキュラムとして準備したのよ」

FOX小隊のメンバーのニコ、オトギ、クルミからフォローが入る。要するに、通過儀礼として後輩をシゴク文化の中で、SRTの正規のカリキュラムとしては到底用意できないようなくすぐり拷問訓練を伝統として続けている、ということだった。

「ミユちゃんのおんな大きな声、私も初めて聞いたかも」

「サキは陥落寸前だったけど、笑い転げながらも根性あったのよね」

「モエは……ちよつとヤバいと思ったな、拷問を楽しもうとした」

「さて……月雪小隊長はどれだけ頑張ってくれるかな？ 楽しみにしている」

ミヤコからは設定時間が見えなかったが、タイマーがセットされた。アラームが鳴るまで耐えれば終わり、という説明がされた。

「じゃあ、ここに座って、脚は伸ばしてね」

くすぐり拷問の準備が始まる。着用してきた水着姿のまま、作業用のリクライニングチェアのようなものに座らせられた。

椅子に座った体勢で、両手は柔らかな手錠をかけられて頭の上で固定される。両脚は椅子の端まで伸ばした状態で、足首に板のような拘束具をかけられる。ミヤコの想定通り腋、脇腹、足の裏が無防備な姿となる。

「痛くはないか？ 痛いとかくすぐりに集中できないぞ」

「……大丈夫です」

シンプルな拘束ながら、体を逸らせる余地はほとんどない。1対4で、無防備な姿を晒して取り囲まれていると、ミヤコはどんどん不安になってくる。

「じゃあ、さっそくいくわよ」

クルミの手が、ミヤコの脇腹を掴む。

「最初は緊張しちゃうから、ほぐしてかないとね？」

ニコの手もミヤコの腋に伸ばされ、なでなでとさすられる。

脇腹を揉まれるだけ、腋を撫でられるだけなら、むずむずとは感じても、それ以上のくすぐったさはない。ミヤコは拍子抜けした。

「まだ、よくわからないって顔してるね。まあ、リラックスしてからが大変なだけだね」

「そうだな。やはり足裏をやらないとな」

少し気が緩んでいたミヤコも、ユキノに足裏を触れられると一変した。

ユキノの左手で足裏を伸ばされ、右手の指で、脚指の付け根に爪を立てて、カリカリとくすぐられる。

「はひっ!!」

強烈な刺激に、思わず足を引っ込めようとするも、拘束板のせいで逃げることはできない。

「おっ、これは苦手みたいだな」

ミヤコの反応に好感触を得たユキノは、手を指の付け根から土踏まずの部分まで動かして、足裏全体を耕すようにわしやわしやとまさぐっていく。

ミヤコは身を固くして、そのくすぐったさをこらえようとしたが、他の先輩たちはその隙を見逃さなかった。

ニコは、腕を上げたままに閉じることのできない腋に指を這わせ、指の腹で優しく撫で上げる。

クルミは、脇腹のあたりを軽く爪を立てながら揉みこみ、反応の良い場所を探り始める。

足元にもぐりこんだオトギは、ピンと伸びた脚の太ももに手を伸ばし、内股のあたりを撫でくすぐる。

「ひっ、はっ、あっ……！」

ひとつひとつの刺激なら、きっとミヤコにも耐えることができた。ただ、くすぐり上手な4人が、それぞれの弱点を同時に刺激してくると、耐える術がない。

「はっ、や、やめっ!!」

「おー？ 効いてきたかな？」

ミヤコの見せた一瞬の焦りを、彼女たちは見逃さなかった。指のスピードを速めて、より強いくすぐったさをミヤコに加えてくる。

「はひゃあ!! あはっ、あはははははははっ!! いやああっ!!」

足裏の刺激と、脇腹の柔らかな揉み込み、内腿と腋下を這う指の感触の、全てがつながった。身体のあちこちのくすぐったさが駆け巡り、肺から空気が押し出され、大きな笑い声となる。反射的に身体をよじらせようとしても、どの手からも逃れることができない。

「我慢できなくなってきたかな？ でも、まだ始まったばかりだよ？」ニコの指がミヤコの腋の下、皮膚の薄い場所をとらえ、わしやわしやと撫でまわす。ミヤコは反射的に腋を閉じようとするが、腕が動かず痛むだけ。

「ようやく声が出てきたな」

ユキノは、硬めの毛のブラシを取り出し、閉じることのできないミヤコの足裏を磨き上げる。指の付け根からかかとまで、日々の鍛錬で硬くなっている足裏に細かな痕をつけるように、しよりしよりと擦る。鮮烈な刺激に足をバタバタと振ろうとするが、それも無駄な抵抗に終わる。

「弱点だけはなんとかくすぐられないようにって、底おうとするでしょ。みんなバレてるのよ」

大きく広げられたクルミの手が腰まわりを掴み、揉み込みながらこちょこちょと指を這わせる。脇腹のやわらかいところを掴んで、柔らかさなくくすぐったさだけを与え続けるように揉まれる。しかし、ミヤコにとっては耐えがたい刺激だ。

「こういう刺激も、効くよね」

オトギの指が、ピンと張り詰めたミヤコの太腿の筋を、ツーツと撫でていく。

「ひにゃあああ!!」

今までに経験したことのない刺激に、ミヤコの腰が跳ね上がる。オトギのくすぐりは、ただ爪で線を書くだけのようなものだったが、それでも今のミヤコにとっては強烈すぎた。

「ここ、意外とくすぐりたいでしょ？」

「はひっ、はひっ、あはははははっ!!」

笑い声を我慢しようと歯を食いしばろうとしても、お腹と肺から押し出された空気が笑いになって口から溢れてしまう。

一匹の野ウサギに群がる、四匹の狐。SRTの上下関係を、改めて「肌」でわからせていく。ミヤコは、そのくすぐりの恐ろしさを骨身にしみて感じさせられた。

クルミが腋の下と脇腹を同時に揉み込み、ユキノは足裏の土踏まずに爪を立ててカリカリとくすぐる。オトギは太ももに指を這わせてこちよこちよとくすぐっているし、ニコも腋の下やお腹まわりで指を踊らせている。

ミヤコがひとしきり笑い続けると、息苦しさとともにだんだん反応が薄くなる。むせるような呼吸とともに、何とか肺に新鮮な空気を送り込もうとしていた。

そして、そんなくすぐったさの嵐の中にいるミヤコにニコが声をかける。

「これで終わりって思っただけだね？」

ミヤコには、その言葉を理解することができなかった。今だって十分すぎるほど苦しいのに？ その疑問に対する答えはすぐに示された。

腋下で指を滑らせ、弱点を責め続けていたニコが、水着に覆われた胸の頂へと指を伸ばす。興奮で少し硬くなっていた乳首が、ニコの人差し指で優しくつつかれた。

「ひゃあっ!!」

「いい反応、普段から弄ってるね？」

「こっちのくにくにと、腋のこちよこちよはどっちが気持ちいいかな？」

もどかしい快感だけが蓄積され、いくことはないが、その分緩んだ感覚を、絶え間なくくすぐりが埋めていく。

笑い声に混ざり込む、艶っぽい吐息。何人もの先輩の前で、性感帯を刺激される恥ずかしさがこみ上げる。

予期せぬ刺激に驚いたミヤコを見て、オトギも動き出す。

「人差し指さんと中指さんが、ミヤコの脚をてくてく〜」

枝の上を歩く小鳥のように、オトギの二本の指が太ももを這い、滑っていく。赤ちゃんをあやすときのくすぐり歌に合わせて、意地悪な刺激が加えられる。

「あゝ、ぬるぬるでここ滑っちゃう、あゝ」

わざとらしいセリフとともに、「人差し指さん」がつつーと太腿を滑っていく、むず痒い感覚をミヤコにもたらし。ムードメーカーであるオトギの、意外に攻撃的な側面が光った。

クルミは、うつすらと浮き出た腹筋を人差し指でつついてみたり、臍に指を入れてみたりと、お腹周りの皮膚の薄いところを弄り尽くす。

ユキノも二本目のブラシを取り出し、両足の裏を同時に擦って、逃げ場のなくくすぐったさで追い込んでいく。

繰り返される、くすぐりの波状攻撃。

少しくすぐりの手が緩められて、ミヤコが息を何回か吸った途端に、これまで発見された弱点を集中的に責められてまた苦しめられる。反射的に身をよじっても、身体に力を入れて踏ん張っても、追撃を逃れられない。

「くすぐられるの、辛い？」

オトギの問いかけにミヤコは笑い悶えながら、なんとか首を縦に振る。

「解放してあげよっか？」

想像より何倍も苦しかった責めからの、救いの手が差し伸べられる。藁にも縋る思いで、ミヤコは頷いた。

「タダで、とはいかないわよ」

「そうだな……ミヤコは、ミュと同室だろう？」

急な問いかけに混乱しつつも、ミヤコははいと答える。

「いつもミュと寝てるんだよね？」

「はい、そうです」

「ミヤコの方が、寝付きが悪いと聞いたのだが……ミュの寝言、知ってるよね？」

「知って……いえ、知りません」

ミュの寝言はミヤコの頭の中にはあった。思わず、知っているという口にしそうになるが、一応知らないふりを通そうとする。

「ミュの寝言の中身、正直に教えてくれたら、くすぐりから解放しよう」

「……」

ミヤコは考えを巡らせる。このくすぐり拷問が「強化尋問訓練」と呼ばれていること。先輩たちは楽しんでいるように見えるが、これもまた訓練なのだということに。

「そうか、くすぐりが気に入ったみたいだな」

口を開かないミヤコをよそに、ユキノの言葉で、ふたたびFOX小隊の4人が身体に手を伸ばす。

「はひっ!! やっ、あはははっ!!」

くすぐられているうちに明かされた弱点を、集中的に責められると、もう声を我慢することもできない

「ミヤコちゃん、くすぐられるのが好きなのかな？」

「喋るか、くすぐられるか、どっちか選んでつてことよ」

ミヤコの頭の中には、ミュの寝言の中身がはつきりと思い出されていた。確かに、ミュはときどき大きな寝言を言ってミヤコを驚かせる。

しかし、乙女のプライドとして、寝言なんてものは公然にされたくないはずのものである。

ただ、今のミヤコにこのくすぐりを我慢するのはとても苦しいことだった。

びくびくと体が震え、どこにも行き場のなくすぐったさをどうにか受け流そうとするが、FOX小隊の手技がそれを許さない。

「今言わないと、また15分間チャンスはあげないわよ」

きつと、通過儀礼としては『不合格』になるのだろうと、ミヤコは考える。

「ほら、ここ、くすぐられるのつらいよね? 苦しいよね?」

ニコの手が再び腋の下の苦手な部分をまさぐり、我慢できないくすぐったさにミヤコの全身が暴れる。

「大したことじゃない、少し話してくれるだけでいいんだぞ?」

ミュに対する罪悪感もある。それでも、目の前の甘い苦痛から逃れたいという気持ちにはかなわない。

「悩んじゃだめだよ、ほら、5、4……」

オトギは、カウントダウンをしながら、脇腹揉み責めを加速させる。ミヤコは、肺の空気を押し出す強烈なくすぐったさに襲われる。もう、限界を感じていた。

「言います、言いますっ! ミュの寝言はあ!」

告白を始めると、FOX小隊たちの責めの手はピタッと止まった。「ええと、ミュが、え……はひやっ!! やっ!! 言います言います、やめてくださいっ!!」

言い淀んだミヤコに、すかさずニコが腋への追撃を加える。ミヤコに逡巡の余地はなかった。

「……ミユが、その……作戦外でも、お漏らししちゃうかもって、悩んで……」

ときどき、ピンポイントのくすぐりで続きを促されながら、ミヤコはバディの乙女の秘密を洗いざらい白状させられた。

「あちゃー、言っちゃったね」

「最後に追い詰めたのはニコじゃない」

FOX小隊の間でも、ミヤコの哀れな様子に少し同情の念が浮かぶ。息も絶え絶えで、汗だくのミヤコ。顔は汗と涙と口元にこぼれた涎でぐちゃぐちゃだ。

それでも、くすぐりの地獄から解放されて、ようやく安堵していた。

だが、ミヤコのくすぐり地獄は終わっていなかった。

FOX小隊の先輩たちからは解放されたものの、今度は同期であるRABBIT小隊のメンバーからくすぐられることになった。

結局、タイマーが鳴る前にくすぐり拷問に屈したのは、ミヤコただ一人であった。

先輩たちからくすぐりの手法を教わったばかりのサキ、ミユ、モエによって、不合格となったお仕置きの意味も込めて、ミヤコはくすぐりの練習台にさせられていた。

「あはははははははっ!! だめっ、らめええっ!!」

「おー、これはしっかり訓練しないと。小隊長ともあろうRABBIT1が、こんなくすぐりに負けてたらマズいぞ」

サキが、シリコンのイボがびっしり並んだ手袋で脇腹をマッサージする。

「いつもおすましさんのミヤコにも、こんな弱点があったなんてねえ」

モエが、手にした電動歯ブラシで足の指間を磨き上げる。

「はははははははっ、ごめ、ごめえええっ!!」

再び腕と脚を拘束されたミヤコは、このくすぐりから逃れることができない。

「ミヤコちゃん、くすぐりに負けて私を売っちゃうなんて……酷い……」

何より、自分の秘密を差し出されたミユは、珍しく怒りと侮蔑の感情を露わにしていた。ミユは、鉛筆のように細い指先にローションを絡め、ミヤコの腋下の皮膚の薄いところを撫でまわして責める。ニコがミユに教えた、ミヤコの一歩の弱点だった。

「ごめええええ、なさあああいいい!？」

「反省しないといけないのに、笑ってるのはおかしい、よね?」

「はあ、はあい!! でもっ、むりっいいい、いひひひひ!!」

足裏、脇腹、腋の下、全ての刺激がミヤコの快感神経に牙を剥く。そんな中で突きつけられた、「笑わずに謝罪してほしい」というミユの達成不可能な要求。ミユの気が済むまで、絶対に開放されなくすぐり地獄でミヤコは情けない笑い声を上げ続けた。

一方、ミヤコの隣では、ユキノが同じように目隠しと拘束をされ、ほかのFOX小隊にくすぐられていた。

「ユキノ、後輩たちをくすぐりながらまた興奮してたんだ」

「ミヤコちゃんをあれだけいじめておいて、自分の方がくすぐりに弱いなんて言えないよねえ」

「後輩たちの方が終わるまでは絶対に解放してあげないから、じつくり楽しもうねー」

FOX小隊のメンバーもまた、一年生の頃に同じくくすぐり拷問の通過儀礼を受けていた。その中で一人、くすぐりを克服できず、むしろのめり込んでしまったのが、隊長のユキノだった。

「いひっ、ひはっ、あははははははっ!! やめへくれっ!!」

ユキノの、普段の険しい雰囲気からは想像もできないほどの情けない笑い声が響く。

「自分からくすぐってっってお願ひしたの、やめてだなんて虫がいいと思わない?」

ミヤコを責めていたときは徹底的に刺激していた足裏は、クルミの手によってカリカリと刺激され続けていた。ニコは腋を、オトギが腰回りの弱点を断続的に刺激している。

くすぐりのツボを知り尽くした三人による責めは、ユキノを限界まで追い込んでいく。定期的に開催されるくすぐりプレイで、ユキノがくすぐられたくない弱点は全てバレている。

「今度は後輩たちにも混ぜてもらって、みんなでくすぐってあげようね、七人がかりで」

「そうしたら、隊長、本当に壊れちゃうかもね」

隊員三人のくすぐりを受け、ユキノは笑い悶えつつも、被虐の喜びに浸り続けていた。

深夜の居室に、小隊長二人の笑い声が響いている。苦しそうだけど、どこか悦びの混ざる響き。

一羽の野ウサギは、くすぐりの妖しい魅力に取り込まれそうだ。

小悪魔にお仕置きを

しよつく

シャーレでいつも通り山ほどある書類を整理している先生。今日はシャーレの当番もない日で、仕事に集中できると思った先生は今日中に終わらせるぞと意気込んでいた。

ガチャッ！

「やつほく先生♪」

そんな空気を打ち消すような声を発しながら勢いよくドアを開けて入ってきたのは、ゲヘナ学園に所属してる浅黄ムツキだった。突然の来訪に驚いた先生は思わず仕事の手を止めた。

「ムツキ？ 今日当番の日じゃなかったはずだけど？」

「ん〜？ いつも通り遊びに来ただけだけど？」

ムツキは遊び道具が入ってるであろうカバンを見せ、いつもの楽しそうな表情を浮かべながら先生に近寄った。

「ねえねえ先生、今日はどんなことして遊ぶ？」

そしていつものように先生を自身の遊びへと誘う。だが、今作業してる仕事の締め切りが近いため、今回ばかりは断った。

「ごめんムツキ、今はこの仕事に集中したいから後でね」
「え〜！？」

断られたことでムツキの顔が一瞬で残念そうな表情に変わる。少し駄々をこねたり甘い表情で誘ってきたがなんとか説得し、作業デスクのすぐ後ろにあるソファーに待機させることにし仕事を再開した。

「じーっ」

「……」

背後から視線を感じる。後ろのソファーに座ってるムツキが遊んでほしそうにこちらを見ているのが分かる。普段なら誘惑に負け、彼女が持参したボードゲーム等で遊んでるところだが今回はそうはいかない。彼女には申し訳ないが構ってる時間が惜しいのだ。

「じーっ……、♪」

だが、そんなことでイタズラ好きの彼女が大人しくするはずもなかった。ムツキは何か思いついたのか身体を先生に向け、片足を持ち上げ背中に狙いを定める。

「おりゃ！」

「痛っ！？」

ムツキが先生の背中を勢いよく蹴った。ムツキの蹴りは一発だけでなく、何発も連続でやってきた。どうやらこうして仕事に集中してる先生を邪魔するというイタズラのようなのだ。

「うりうり」

「痛っ！ ちよつ、蹴らないでムツキ！」

「だって暇なんでもうん。ほらほら、早く構ってくれないともうっと蹴っちゃうよ♪」

彼女もあまり力を入れないで蹴ってるつもりなのは分かってる。だが靴底の硬いゴムの部分が当たると、例え弱い力でも痛いものだ。

「だったら、せめてブーツでは蹴らないでほしいかな」

「ふん」

少し間が空き、ボトッと何かが落ちた音が聞こえたかと思った直後

……

「とうっ！」

「いったあ！？」

ムツキは履いてたブーツを脱ぎ捨て、白い素足を頭にしていた。そして先生に向かってかかと落としをきめたのだ。

「どう先生、これならいいでしょ？」

「いや、脱いだからって蹴っていいわけじゃないよ！？」

思わずツツコミを入れる先生。だかそれとは裏腹に、ムツキの表情はより楽しそうだった。そしてもう片方のブーツも脱ぎ、両足とも素足になった。

「♪」

「ちよつと、ムツキ？ ……痛っ！」

ムツキ本人も楽しくなってきたのか、蹴りのバリエーションが増えてきた。バレリーナのように両方のつま先で先生の背中を何度も突くように、腹部を両サイドから挟むように、ときには両足で何度も押し倒そうとするように。流石に耐えきれなくなった先生は一言入れようと身体をムツキに向けようとする。

「いい加減に……ぐえっ！？」

「あ……」

身体をムツキに向けたタイミングで蹴りあげた左足のつま先が先生の腹部にクリーンヒットした。これには大人といえど耐え難く、先生はお腹を押さえてうずくまってしまった。想定外の出来事にムツキは蹴りあげた体勢のまま固まってしまった。

「あちやう……。先生、大丈夫？」

流石のムツキも心配そうな表情で話しかける。すると先生がムツキの左足首をガシッと掴んだ。

「ひっ！」

「……ムツキ。今のは流石に見過ごせないかな」

先生はおもむろに立ち、ソファアのひじ掛けに座り直すとムツキの左足を掴んだまま膝下辺りを脇に挟み、彼女の足を固定した。

「せ、先生？ いったい何するの？」

「いい質問だね。それは……」

先生はが一瞬ニヤリと笑う。

「お仕置きだよ」

すると先生は空いてるもう片方の手を抑えてるムツキの左足の裏にそつとあてがい、ムツキの小さな足の裏をくすぐりだした。

「あひやつ！？ あっははは！」

突然のことに困惑するムツキ。身体が一瞬跳ねた後、かわいらしい声を上げ笑い転げる。

「ぷひやはははは！ ま、まって先生！ くすぐりなんて聞いてないく！」

「そんなのは関係ないよ。ほら、さっき蹴られた分のお返しだ！」

先生はムツキの足裏をくすぐり続ける。以前ムツキが持ちかけた遊びの最中でくすぐったことがあったが、その時よりも大きな反応を見るからに足裏の方が効いているようだった。

「あははっ、うひやははははっ！ 先生く！ くすぐりたいく！ 足の裏こちよこちよダメなのく！」

「そう、じゃあちよつとだけ優しくしようかな」

先生は指先をこちよこちよとした動きから、人差し指で上下にゆつくり撫でるようなくすぐり方に変える。するとムツキは身体をモゾモゾと揺らしはじめた。今度はくすぐりたいが笑いたくても充分に笑えないもどかしい感覚に、ムツキは眉をハの字に曲げ悶える。

「くんッ、んひひっ！ それ、焦れったくてなんかやだあ……くひひひっ！」

「じゃあさっきみたいにこちよこちよつてする？」

「い、いや！ こっちでいいから！ あひっ！ ひゃひひひッ！」

足裏が弱いムツキは少しでも耐えられる刺激がいいと思ったのかつい口走ってしまう。それは結果として、足裏をくすぐられ続けるのを選んだようなものだとし後悔してしまった。一方、先生はというとムツキの反応を見て楽しくなってきたのか、こちらもくすぐり方のバリエーションを増やしてきた。足裏の中央で円を描くように、1cm程の範囲を細かくこそぐように、ときには一番長い親指の腹を指先で撫でるように。どのようにくすぐってもムツキは面白いように反応する。くすぐったさを紛らわそうと身体をクネクネと曲げてる姿がとても可愛らしくも感じた。

「んひゅふふっ！ せ、先生。もういいで……ッひゃあっ！？」

ムツキの反応が一瞬激しくなる。先生はその瞬間を見逃さなかった。それは、指先が土踏まずに触れたときだった。

「もしかして、ここ弱い？」

「……さ、さあ？　どうかなく、あはは……」

ムツキの視線が明後日の方を見てる。その様子からしてここが弱点なのだろうと察した先生は土踏まずに狙いを定めた。手始めに、土踏まずの形に沿って指先で優しくなぞりだす。

「ツんひい！？　きゃはっはははは！！　先生、やめっ……うひやはは！！」

軽く触れただけで大きく反応するムツキ。その様子を面白く感じた先生は更になぞり続ける。ムツキの土踏まずは驚くほど色白で堀が深く形が整っており、また皮の張りも良く皺一つないきめ細やかな肌をしている。それらの造形美は、まるで一つの陶芸品のようにも見えた。土踏まずの中央を指先で軽くつつくと押し返される感覚を覚える。まるで触らないでと言ってるようだった。そんな神秘的な領域を犯すように、今度は爪を立て優しくカリカリと引っ掻いてみる。

「うあっははははははッ！！　それえッ、ダメだってえっ！！　あひやはははっ！！」

ムツキの身体がビクンッ大きく跳ね、表情に余裕がなくなってくる。普段イタズラで優位に立ってるムツキとは思えない姿に先生は背徳感を感じた。

「じゃあこの土踏まずをさっきみたいに思いっきりくすぐったら、いったいどうなるのかな？」

「えっ！？」

ムツキの目が大きく開く。そこに映ったのは、普段の優しい雰囲気とは程遠い意地悪そうな表情を浮かべた先生だった。

「う、嘘、だよ……先生？　さっきのことは謝るからさ、だから……ね？」

ムツキは震えた声で言う。表情は青ざめ、やめてと言わんばかりに首を横に振っている。だが先生の答えは決まっていた。

「そうだなあ、でもせっかくだから……。今までのイタズラの分もとめてお返ししようか……な！」

「ツ……う……あ、っ！！？　っんああああッははははは！！　いや……っひやひやひやひやひやひやッ！！」

先生の指がムツキの土踏まずを激しく責め立てる。ムツキの身体が激しく仰け反り、狂ったように大声を上げて笑いだした。首をブンブンと振り、腕をバンバンとソファアに叩きつける。

「あああッひやひやひやひやッ！！　ダメえええっ！！　土踏まずやめてえええっへへへへへっ！！　うひやあああッははははははははははッ！！」

（ちよつとやりすぎちゃったかな？）

「ご、ごめんムツキ。流石にやりすぎた……、大丈夫？」

「……はヒッ、はっ、ケホッケホッ、だッ、だい、じょうぶ……ヒヒッ！」

ムツキは朦朧とした意識の中答える。少し落ち着こうと深呼吸をして息を整えようとする。だが、ふと足裏に意識を向けると、まだ余韻として残ってるくすぐったさに短く笑い声を上げてしまう。

「あはッ！ ははっ！ ふう、ふうー……、くふウッ！」

（先生、くすぐるの上手すぎ……。こんなにくすぐったいの、はじめて……）

（アルちゃんにもこんなにくすぐられたこと無いのに……。やば、足の裏、まだくすぐったい……）

（もしまた、今日みたいに先生にイタズラしたら……）

（……また、くすぐってくれるかな？）

ケイと宇宙麻雀とマッサージチェアと

フェムト

「ふっふっふ、ミレニウムが誇るキヴォトス最高峰のAIでも麻雀は苦手なようだね!」

「ドヤ顔してるけどお姉ちゃんそれ不聴立直だからね」

「うぐ、ハ、ハツタリってやつだよ!」

「こ、こんなはずでは……」

ゲーム開発部。

ミレニウムサイエンススクールの某所に部室を構えるこの部では、紆余曲折あつて新たにケイを部員に加え、

次のミレニウムプライスに神ゲー……もとい廃部回避のための大作を出展するため、今日も他作品研究が行われていた。

「だいたいなんですかこのゲームは!? 白發中で順子になったり九から一にループしてたり!」

「宇宙麻雀だね。上家以外からもチーできたり、あと七対子は役じゃなかったりするよ」

「キヴォトス最高のAIでもさすがに常識外れのルールは未実装だったようだね!」

「アリス、覚えました! ドラを持っていればいつでも和了れるんですね! これでユウカもハコにできます!」

「アリスちゃん、それはここ以外の麻雀でやっちゃダメだよ」

傍から見るとユズ、モモイ、ミドリ、ケイで麻雀ゲームを遊んでい

るようにしか見えないが、本人たちがゲーム研究だと言い張るのならそうなのだろう。

さて、ところでこれは麻雀である。

当然ヴァルキューレの御用になりかねないのでクレジットは賭けていないが、代わりに敗者にはとある罰ゲームが待っていた。

「というわけで飛ばされたケイには、このエンジニア部のマッサージチェアの人柱になってもらいます!」

「ぐ、納得いきませんが……まあ最悪破壊するのでいいでしょう」

「ケイちゃん、部室吹き飛ばからそれはやめよう」

と、会話を交わしながら向かった先にあるのは、まるで温泉宿にでもありそうなマッサージチェア。

エンジニア部にケイの身体を作ってもらったときに、「せっかくだから作ってみた」と渡されたものだった。具体的な内容は覚えていないが、コトりの話がいつもより長かったことから、また妙な機能がついているのは間違いない。

だがゲーム制作にしろ遊ぶにしろ、長時間同じ姿勢で座り続けるゲーム開発部にとって、マッサージチェアはなんとしてでも手に入れた備品だ。

そこでゲームで負けた誰か一人を人柱にして安全な使い方を探ろう、というわけである。

いざとなったら力づくでどうにかするつもりだからか、さほど警戒せずにマッサージチェアに腰掛けるケイ。とはいえ何が起こるかは分からないからか、恐るおそるスイッチへと手を伸ばす。

「では、スイッチ入れますね」

「あのエンジニア部製のマッサージチェアだもん、絶対変なこと起こるに決まってるからね」

ピッ。と部屋に響く電子音。

そして家電がよく出すような機械の音が続けて椅子から鳴り始める。

「っ、これは……」

「……これは？」

「……普通のマッサージチェアです。最近肩凝りが酷かったのでよく効きますね」

「おおお！ ってことは使って大丈夫そうじゃん！」

「ケイちゃんの身体って肩凝ったりするんだ」

「ずるいです！ アリスもマッサージチェア使いたいです！」

「ダメです、敗者の特権です」

余計な機能だらけなら警戒するが、特に何もしてこない期待通りのマッサージチェアであれば、罰ゲームどころか役得である。

アリスの要望を押し退け、マッサージチェアにより深く体を預け、マッサージモードを切り替えて日頃の疲れを癒すケイ。

数パターンほど切り替えてみても特に変わった動作をすることはなく、すっかりとリラックスして油断していた。

が、それはあるボタンを押したときに、さも正規の動作であるかのように起こった。

突然現れたベルトのような枷が、一瞬でケイの手首や足首、腰、膝にシュルシュルと巻きつき、動けないようにと拘束したのだ。

「なっ！？ 何ですかこれは！？」

「うわあ……やっぱり変な機能あったね。うわまたなんか出てきた……なにこれマジックハンド型の浮遊ロボット？」

「すごいです！ 座ったまま魔導ビットで勇者と戦う第一形態の魔王みたいです！」

「バカなこと言っていないで外すの手伝ってください！ マニュアルとかないんですか……！？」

ガチャガチャとなんとか抜け出そうとするケイだが、おそらくエンジニア部によってキヴォトスの生徒を対象に設計されているであろうその拘束は強固であり、ケイをもつてしても一向に抜け出せる気配がない。

そして焦り始めたケイに追い打ちをかけるかのように、ふよふよと漂っていただけのマジックハンドがじりじりと近づいていく。

「な、なんですか……なにをするつもりですか……」

「あ、あったよ、マニュアル。『指圧デバイス式全身リラクゼーションモード 全自動浮遊デバイスが体中の溜まった疲れを取り除きます。マッサージに集中できる安全ベルトシステム付き』……だって」

「安全ベルトが必要なマッサージって何！？」

「アリス知ってます！ この前エンジニア部がユウカに試したって言うてました！」

「確信犯だね、それ……」

ツッコミどころの多いマッサージチェアだが、機械にツッコミを入れたところで反応が返ってくるわけでもない。

そしてマジックハンドたちはマッサージの役目を果たすべく、ケイ

の体へと殺到すると、肩や脇腹、腰、太股といった箇所を揉みほぐし始めた。

「くっ、ふふふ……この、どこ触ってるんですか……!」

「だ、大丈夫ですか……? どこか痛いとか……」

「痛くはないんですが、その、く、くすぐった、ふふっ……んひっ、くっふふふふ……!」

「あー、マッサージってそういう……」

「アリス知ってます。R18規制を回避するためにギリギリを攻めた結果よく使われるようになった手法です!」

「ななな、何言ってるんですかアリス……ふひっ、あっ、そこっ……んっくうっふふふ……」

ケイが一切抵抗できないのをいいことに、マジックハンドたちはジャケットの袖やスカートの裾へ潜り込み、さわさわ、もみもみ、とケイにくすぐったい刺激を与える。

それもただコリを揉み解すだけではなく、脚の付け根をコリコリと押ししたり、脇腹の辺りを指先でこしょこしょとくすぐったり、耳の淵を指先ですううっとなぞったりと、傍から見ても普通のマッサージではないのはユズやミドリたちから見ても明らかだった。

「くふ、はひいつ、んふっふふふふ……み、見てないで手伝ってくだひやっ、ううん……!! 電源ケーブル抜けば止まるのではっ、ないですうっ、かっ……?」

「もう抜いてみるんだけど……」

「止まらないね」

「コトリが言っていました! 非常事態に備えて予備電源が一週間分

内蔵だそうです!」

「非常事態より優先度の高いマッサージチェアってなんですか!?!」

あまりの謎機能にくすぐったさを一瞬忘れて声を上げるケイだったが、すぐに我に返り、再び体をくねらせる。

「えっと……。とりあえずモモイはエンジニア部から誰か呼んで来て。その間私たちで止められないか試そう」

「わ、わかった!」

「アリスもヒマリ先輩とかを呼びに行った方がいいですか?」

「うーん、それは終わった後に気まづくなるからやめておこう……。ケイちゃん絶対怒ると思うよ……。さて、と」

モモイを見送り、マニュアルを片手にケイに向き合うユズ。

しばらくマニュアルとマッサージチェアを眉をしかめて交互に見ていたが、少しするとすぐに諦めの表情に変わった。

「……特に停止ボタンとかなないね。一回始まったらそれっきりみたい。ベータ版って書いてあるし……」

「なっんでそんな、ふふふっ、中途半端に出来上がった、ものがっ、んひっ、くうう……」

「あ、ケイちゃん、あんまり変に体よじるとボタンに指が……」

「ひひやっ、えっ、あっ……!」

ピッ。

ユズがケイに注意するものの少しばかり間に合わず、部屋に電子音が響く。それと同時にケイに群がるマジックハンドたちの動きがより

「っ！？ ふはっ、あはははははははははは！！ な、なんですか急に
いっはははははははははははははははは！！」
「あわわ……余計激しくなった……」
「あ、オーバークロックモードって出ています！」
「なんでそんな機能があるんですっふふふふふふふふふふ！！ あはっ、
あああああーっはははははははははは！！！！」

スカートの中にもぐりこんだマジックハンドには腰骨をコリユコリユとこねる動きが増え、逃げようと腰を振ると、脇腹をくすぐつていた指がぐにと突き刺さり、余計にくすぐつたさを感じてしまう。脇腹や腋をくすぐっていた手は増援を呼び、器用にもケイの制服のボタンを外してより素肌をくすぐりやすくする。さすがにスカートや下着までは脱がせていないが、それでも鎖骨付近や腋、二の腕、下乳などの無防備になった弱いところに今がチャンスと言わんばかりに新たなマジックハンドたちが殺到する。

[illegible]

「つあ、あはっ、あはははははははははは！　はっ、早く止めて
くださ、っひひひひひひ！！　何かしらそれらしきっひひひ、ものが
っははははははははは！　あっ、あっ——ははははは、あるのではっは
ははははははははは！」

ピツ、とミドリに押されたボタンが音を立てる。

ミドリの押したボタンによつて指示を受け取ったマジックハンドたちは、辛うじてマッサージの体裁を保つていた動きから、なぜか本格的にこちよこちよとケイをくすぐるような動きへと変化した。

「わわっ、ごめん！」

「はわわ、マジックハンドがケイの下着の中に入り込んであんなことやこんなことを……！」

「わわわ、えっと……！ これとか？ こっちは……！？」

必至に制止を訴えるケイだが、ただのマッサージチェアとそのデバイスに過ぎないマジックハンドは当然聞く耳を持たず、ケイをひたすらくすぐり続けた。

しかもミドリが何かボタンを押すたびに責めが変化し、全くくすぐったさに慣れることができない。

お腹や脇腹をさわさわ、ふにふにと撫でまわし、腰骨には指を突き立てコリコリと突き立てる。

少し開いた腋は窪みをこちょこちょとしつこく指でくすぐられ、ほんの少しだけ膨らみのある胸はこしょこしょと性感を煽るようにくすぐられる。

内腿や脚の付け根に至っては、マジックハンドの動きこそこしょこしょこちょこちょという見るからにくすぐったそうな動きだが、力加減は素肌にぎりぎり触れるくらいで半ば快楽責めのようになっていた。

そしてひとしきりケイの身体を味わいつくしたのか、マッサージチェアは次の責めを始めようとする。

「うあ、んははは、ふふっ、んううう……いつ!? なっ、なんですか、せなかつ、何か当たって、ふああああああっ!」

「ケ、ケイちゃん……?」

「ど、どうしましたか……?」

突然、首筋に突起のような何かを押し当てられるような感覚。

次は何だと身構えていると、背骨に沿って首筋から腰までつうつと指のような突起に背中をなぞられる。

ゾワゾワつとしたくすぐったさとも快楽ともいえるような感覚に、いままで出したことのないようなはしたない声を上げるケイ。

マジックハンドたちの動きは変わらないため、椅子の中で何らかの機構が作動したのは間違いない。

「せ、背中になにかがつ、こ、これはっ……ゆ、ゆびですかっ……? つ、あつ、ふひゅううううううううううう!」

「背中って、椅子の中からってこと……?」

「背もたれの中あああああつ!? や、やめてくださ、いいいいつつ、それだめっ、ですつつ……!」

見えない何かにひと撫でされるたびに悲鳴を上げるケイ。

ケイのその反応を読み取ったかのように、今度は背中だけではなく、肩、腰、お尻、太股、ふくらはぎと、椅子と接するあらゆる面に先ほどケイに嬌声を上げさせた突起が押し当てられる。

それに合わせるように、マジックハンドたちも指先をぴとつとケイの体に吸い付かせる。

その瞬間、ケイの全身の神経がぶわつと栗立った。

長時間のくすぐり責めで敏感になった体が、これだけはまずいと一斉に警鐘を鳴らし始める。

心配そうに覗き込むユズやミドリ、アリスに目配せで助けを求めるも、全員お手上げなのか、申し訳なさそうに目を逸らされてしまった。

「だ、だめです……今それだけは、そんなの絶対耐えられ——あつ、おあああああああつ……!」

拒絶の言葉を放とうとすると同時に、突起やマジックハンドがゆつくりと触れるか触れないかの力加減でケイの体を撫でまわし始める。今までと違ってくすぐったさと心地よさ、快感の全てが混ざったよ

うな強烈すぎるくすぐったさに、笑い声とも嬌声とも違った情けない叫び声がケイの口から洩れる。

「これっこれ、すーってするのだめっ、だめっ、うおおあああああああううううううっ!? ふひひっ、あっ、くひひひひひひっ!ー! く、くすぐるのも無理ですううううっふっふっふっふふふふふふふふふふふ!ー!ー!ー!」

「ユ、ユズ、ミドリ、このままじゃケイが!ー!」

「うう……ごめんねケイちゃん、もう少しでモモイが戻ってくるからそれまで……!」

「……あ、お姉ちゃん、いまエンジニア部連れて戻ってきてるって!」

「あああああああーっはははははははは!ー! も、もううやめっへへへへへへへへ!ー! やめひゅえくだひやあああああー!ー!ー! ああああっはははははははははは!ー!ー!ー!」

モモイから何か着信を受けたらしいミドリがタブレットをケイに見せるが、今までで一番の責めをされているケイにはそれを見る余裕などあるはずもない。

一方でマジックハンドたちはそんなことはお構いなく、ケイの内腿、腰、お尻、胸などの敏感な箇所へ狙いを絞り、こちょこちょこちょちよとくすぐり始める。

性癖をくすぐりで上書きするような責めに耐えることなど到底できず、涎と涙をこぼしながら一心不乱に身を振る。

「たすけええええっへはははははははは! だれかこれとめっへへへへへへ、あああああああっはははははははは!ー!ー!ー! あっっっ、あああああああー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

あまりのくすぐったさに限界が来たのか、意識が飛びそうになるのを何とか耐える。

目をぎゅつと瞑り、動ける範囲で体を縮こませ、少しでもくすぐったさに耐えようとするケイ。

だが、不意打ちでお腹をすすすうー!ー!となぞられたそのときだった。

吹き出すのを我慢しようとしたときに、運悪く最後までたまたま触れなかったスイッチへと指が当たり、押し込んでしまう。

目を閉じているので何が起こっているのかは分からないが、ガシャンガシャンと何かが動く音がケイの耳に入る。

「あ、ケイちゃん……!」

「にやっにやんですか、あああっはははははははははは!ー! ひゅいつ、ふあ、な、なんですか、これえええっへへへへへはっはっはっはっははははははははははは!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

ケイの目に映ったのは、丸い形をして表面にふんわりとした毛が生えた、卵くらいの大サイズの大量の浮遊回転ブラシ。

シューイイーン、と音を立てて高速で表面が回転しているそれが一体何をしてくるかは想像に難くない。

「ま、まっってください、ダメです!ー! それ絶対ダメでっ、ひあっ、あああああああああー!ー!っはっはっははははははははははははは!ー!ー!ー! むりむりむりいいい、こんなのっむりでっすうううっふあああああはははははははははは!ー!ー!ー!」

もより控えめな解説で緊急停止スイッチを入れる。

同時にあれだけ暴れていたマッサージチェアや浮遊ビットが、糸が切れたようにぴたりと動きを止めた。

「あはは、あ、あはははは、はあああ……と、止まりました……？」

「ケイ……大丈夫ですか……！」

解放されたケイに一番に駆け寄るアリス。

いつもなら心配そうな顔をするアリスの名を呼ぶケイであったが、さすがに今回は無理なのか、肩で息をしながら呼吸を整えていた。

「いやー、以前セミナー向けに作ったマッサージ機を改良したのですが、そのときにつけたくすぐり機能が一部に好評だったようなのでそちらも改良しておいたんです！ とはいえ人間どうしてもくすぐられてると拒否の言葉を言ってしまうから、それを利用してそういう言葉を感じて出力を上げるような仕組みを追加してみました！ しかもこの音声認識システムは対象の感情も即座に分析して一番効果的になるように自動でチューニングするんですね。当然この手のマシンとしてユーザーのリアクションをリアルタイム解析する技術は常に追求されていますから、過去に開発された『拘束をあえて緩くして効果的なポイントを探るシステム』や『ランダム性による毎回違った効果を期待できる仕組み』なども盛り込んでいます！ 正直モモイさんかアリスさんが真っ先に使うと思っていたのでケイさんが最初の利用者になるのは想定外でしたが、それでもきつと効果抜群のマッサージに……ケイさん？」

長々と解説をするコトリの横で、やっと息を整えたケイがふらりと

立ち上がる。

いつもより……というより、かつて対峙したあの時よりも表情がさらに険しいのは、その場にいた誰から見ても明らかであった。

[…Divi:SION]

「うわああ……！ ケイさん！ 落ち着いて……！」

「それはダメです！ 部屋のゲーム機が壊れちゃいます……！」

「うわあっ！？ 部屋の外にいつの間にか変なロボットが……！」

——後日。

「あれ、ケイ、そのマッサージチェアって……」

「ああ、これですか。あの後エンジニア部を脅迫して普通のマッサージチェアを作らせました。マッサージ機能自体はとても良いものでしたから。最初からこれだけならよかったのですが」

「あつ、後ろに何かボタンがついています！ これは絶対に押しちゃいけないやつです！」

「……王女。いえ、アリス。ダメですよ？ 絶対に押しではダメですからね？」

「はい！ アリス知ってます。そう言われたときはボタンを押すのがマナーだと！」

その後ゲーム開発部で一波乱あった後に、エンジニア部に再び正体不明のロボットが押し掛けたのは言うまでもない。

了

ミドリとくすぐりトラップダンジョン

ソーダ

時刻は夜、シャーレの休憩室前にて才羽ミドリは一人ポツンと立ち尽くしていた。

理由は単純、最後の一步を踏み出す決心を付ける為である。

だが、その一步が中々踏み出せない。

かれこれもう数分以上ここで彼女は棒立ちを続けている。

「……………」

ノックをしようと掲げた手は、ドアに触れる寸前にスルリと力を失う。これもまた数えて四回目になる行動だった。

「……………」

何をやっているんだと自問自答を繰り返す。

決心をしたのに最後の最後で尻込みをしまっていては本末転倒だ。そもそもここで躊躇するなら初めからこんなことを企てていない。

ギョツツ！！と、右手に抱えたある物を力強く抱きしめて、ミドリは最後の勇気を絞り出し優しくドアを二回叩く。

扉の奥からガサゴソと音が聞こえてきたのはその直後。

ガチャつと、開けられたのは十五秒程後。

現れた先生は、ミドリの顔を見るやいなや、少し驚いたような表情を浮かべていた。

「あれ、ミドリ？ どうしたのこんな時間に」

遅い時間にやって来たのに先生は嫌な顔一つせず優しい笑顔でミドリを出迎えた。

その態度に、表情にミドリの心臓がまた高鳴る。

頬が一段と、赤くなる。

ああ、今から私はとても恥ずかしい所を先生に見せることになる。後戻りするならここが最後、でも、もう後戻りはしない。

今日、私は先生を落とすんだ。

そんな覚悟を胸に抱えた少女は、唇を震わせながら要件を伝える。

「せ、先生、すこ、し……お、お時間……良い、ですか……？」

それが、ミドリと先生が送ることになる長い夜の最初の会話だった。

「先生、こちらです」

シャーレの普段あまり使われていない部屋に、ミドリは先生を招く。連れてこられた先生は、部屋にあったある物を見て僅かに目を見開いていた。

先生が記憶にないぞと言う顔をするのも当たり前だった。

何故なら彼が不審に思っている物は全部、今日この日の為にミドリが持ち込んだ物なのだから。

部屋には壁一面を覆うかのような特大のモニターと、座り心地の良

さそうな黒色のマッサージチェアが一台。

しかしそれはそう言う用途を行うように見えているだけで、実際は

もつと歪な役割を果たす物。

「実は……今から私があるゲームのテストプレイを行うので、それを見て欲しいんです」

不思議な顔をする先生にミドリはゲームソフトを見せて説明する。

パッケージにはおどろおどろしさを感じさせる赤紫色の触手と、その触手にあられもない姿で絡め取られている可愛らしい少女のイラストが描かれていた。

「ミドリ、これは……」

「今、キヴォトスではこういう、その……えっちな物がちよつとした人気で、流行っているのは本とか……玩具とかなんです、私達はエンジニア部と協力してゲームにしてみました……！ 体感型、シミュレーションです。現実には無い快感を、というコンセプトで、フア、フアンタジー寄りの物を……。加えて、気持ち良いのだと先生が見てられないかなと思って、その、テスト用でくすぐったいのを、持ってきました」

けど。と、先生がミドリを説得するフェイズに入る前に一気に内容を捲し立てる。

諫める方向に走らせてはいけない

先生ならば絶対に止めて来るのを分かっている、説得をミドリは潰していく。

「プレイヤーがゲーム中に受けたくすぐったい感覚をあの椅子を通して身体に与えます。でも、まだテスト段階で……問題が無さそうならそれで良いんですが、あった場合、第三者による助けが必要で、それで先生について……」

他の人に乱れる部分は見られたくないからと、先生を白羽の矢に立てた理由を述べる。

でも半分以上嘘だった。

乱れる様子を先生に見させて、欲情して欲しいと言う気持ちの方が大分強い。

「あ、パッケージはアレですが、そんなに激しいのは最初だから作ってないんです。基準も分かって無いのにそう言うのは危ないから最初は優しめにしてます……。その……お願い、出来ませんか……？」

嘘だった。

本当は途轍もなく、えぐい物を持ち出して来ている。

効果こそ実証していないが、物凄く、くすぐったくなるような物を作った。

「協力……してくれませんか？」

トドメの一撃を放つ。

泣き落としだ。

ここで首を横に振らないでと、暗にお願いする。

そんなミドリの願いは。

「……分かったよ。だからそんな泣きそうな顔をしないで」

彼の優しい声と共に、無事に届いたことを報せた。

「ありがとうございます、先生！」

大きく頭を下げ礼を述べたミドリは早速準備に取り掛かり始める。

関門は全て突破した。

残る懸念はたった一つ。

（どうか私の姿を見て……えっちな気分になってくれますように、襲ってくれますように）

彼の理性を、心を、自分の煽情的な姿で溶かせるかどうかだった。

「んう……動かせない……」

椅子に身体を預けたミドリは、これ見よがしに発言する。

四肢は柔らかい素材で出来た収縮自在な拘束用の穴に預けた。

これでもう、ゲームが終わるまでミドリは抵抗できない。

後は、頭部付近にあるヘルメットを被れば、五感全てがゲーム内に移動する。

「最後に一つ、ゲーム中、多分ずっとイヤとか、止めてとか、やめてとか、たくさん言うと思いますけど、だからと言ってヘルメットを持

ち上げてプレイを中断させないで下さいね。感覚繋いでいるのでこれを無理やり中断させるとゲームはおろか私まで危険なので……」

これも嘘だ。

安全対策として、ヘルメットを外せば即意識がゲーム世界から現実に戻る様になっている。

そうして何も知らない先生を騙して着実に誘惑への道を進めているミドリは現在、ショーツ一枚の格好で椅子に座っていた。

服は着ないことを想定している。そういう名目で全部脱ごうとしたが流石に全部はダメと先生に止められた。

「で、出来るだけゲーム画面の方だけ見てるね」

恥ずかしそうに眼を伏せながら先生が言う。

どっちも変わらないと思うけどなというツッコミをグッと堪えて、彼女はコンソールを弄ってヘルメットを装着する。

（くすぐったいの弱いからどうなるか怖いけど……、頑張るね、先生）
視界が真っ暗に覆われ、ゲームを始めますかの文字列と、『はい』と『いいえ』の選択肢が表示される。

一拍、二拍置いて、最後に一つふう、と、ミドリは息を吐き出すと。

『はい』の方に視線を動かす。

直後、言い知れない浮遊感に近い感覚がミドリの全身を包んだ。

その後、良く見知った少女の元気な声がミドリの耳を通り抜けた。
ゲームスタートです！！ と。言う元気な声と共に。

真っ暗だった視界が一気に開けたのは、ゲームスタートの音声が響いてから五秒後のことだった。

気が付けば、見るからに妖しさが垣間見えるダンジョンと思わしき場所の入り口付近に転送されていた。

「……うん、ちゃんと五感がある」

手頃な場所にあった壁を手でなぞり、確かな石造りの感覚が伝わったのを確認しちゃんとゲームが出来上がっていることを確認する。

ここで受けた感覚は、実際に受けた物として身体に伝わることを、今ので実感する。

ふと自分の身体を見れば、黄緑色を基調とした薄い生地 of 衣服を着込んでいた。

しかしその袖口は大きく開いており、おまけに半袖。

服の裾も非常にゆったりとしており、鎧では無くあくまで服なのもあって、防御面にはまるで期待が持てない服装だった。

加えて膝上数十センチのプリーツスカートと、上半身も下半身も全く身を守る気が無い。

「ま、まあ……これが当然……か。戦えたら意味……ないもんね」
そもそもミドリが遊んでいるのは普通のダンジョン攻略体感型ゲームではない。

プレイヤーがダンジョンの仕掛けやモンスターによって凌辱されるのを前提に作ったゲームである。

そりやこういう格好にもなるか、と、自虐気味に言いながら彼女は右手をおもむろに自身のお腹をさすり。

「ん、くうつつ!!」

ビクツツ!! と、その身を跳ねさせて可愛らしい声を上げた。

「ちよ、ちよっとこの服、自分で少し触っただけなのに、く、くすぐったいんだけど……」

それもちよっとどころでは無く、相当くすぐったい。

具体的には、自分の指をお腹で五秒轟かせたら、もう耐えられ無いぐらいにくすぐったい。

何てことしてくれたのお姉ちゃん……。と、未だムズムズする感覚に困らされつつ衣服のパラメータを設定したであろう姉に文句をぶつけた後、ミドリは覚悟を決める様にスリと鞘から長身の剣を抜いた。雰囲気作りと、抵抗できる物自体はあるとプレイヤーに思い込ませる為の装備だ。これが役立つ場面は一切存在しない。

護身用にもならないそれを護身用代わりに構えつつ、ゴクリと唾を飲み込みながら恐る恐るダンジョンの地下へと続く階段を降りて行く。このゲームは一回のプレイ毎に違う姿を見せるローグライク型のエロトラップダンジョン。

何が待ち受けているのか、開発者の一人であるミドリも知らない。

ミドリ ステータス。

残りHP 五〇〇

状態異常 無し

地下一階。

くすぐり耐久試験。

「うわ……これ見よがしな扉だ……」

階段を降りた先に辿り着いた小部屋の先に待ち受けていたのは、本来鍵穴に当たる場所に丁度腕がスッポリ嵌まる大きさの穴が二つ開いてある扉と、その横に置かれている大きな砂時計だった。

どうやら、開きたいならここに両手を突っ込み、砂時計が落ちきるまでくすぐりに耐えろと言うことらしい。

もつとも、耐えられなくても砂時計が落ちるまでくすぐられるのはこの穴に腕を突っ込んだ時点で確定するのだが。

「うう……イヤだなあ」

思わず口に出してしまいが、ここで退却することも出来ない。

立ち止まっても仕方ないと、剣を収めたミドリは覚悟を決めて扉へと向かう一歩を踏み出す。

カチリと、その一歩を踏み込んだ床から何かが作動した音が響いたのはそのすぐ後の出来事だった

「へ……？」

その音に戸惑った声を出したのが一瞬。

「あっつ!!」

畏を踏んだのだと理解したのがその直後。

そして。

「きやあああああッッ!!」

ベチャッ! と、粘着性のある液体を頭から被った。

スライムだ。と、開発時の記憶からミドリは咄嗟に招待を見破る。しかしそれは何の突破口にもならない。むしろ、瞬く間にミドリは顔を青ざめさせて行く。これが何をしてくるかを知っているからだ。

その予感を裏切ることなく、彼女の身体に落ちたスライムはベツトリと巻き付くようにミドリ全身に張り付き。

そのままブルブルと振動を始めた。

「くくくくくくくくくッッッ!?! きやひっつ!! ひっつひやめっつやっつやっつ!!」

途端、彼女の表情に笑顔が刻まれ始め……。

けれども、実態はそうではない。

ミドリ^①の目的は、別にある。

（あ、あつたつっっ！！ この、窪みにひひひひ、に、二秒……手を、お、けば……！ あっ！ あはひやひひははははっ！！）

「やめつつくすぐったひひひひひひっ！ すこし、すこしだけでもいいからゆるしてへへへへへへへへへへっ！！ 手を弱めてへへへへへへへっ」

先生のくすぐりに本気で悶えながら、その場に留まる。

そうしてくすぐったさに悶えて二秒が経過した頃、添えていた石壁の手触りが変わる。

(よ、よし……!!) これで、後はおり、るだけへへへへへへ)

それは、予めミドリが仕込んでおいた特別コマンドを実行するためのスイッチだった。

フロア攻略後、次に進まず休み続けた場合に起きる、プレイヤーに緊張感を持たせる為に設置したゲームオーバー直行のくすぐり地獄イベントを、次のフロアのイベントとして割り込み配置する。

ミドリがやるべき事としたもう一つとは、時間制限による地獄のくすぐりお仕置き部屋を次のイベントに配置し、ゲームオーバーとなつて現実世界に帰還し先生に襲われることだった。

その為にミドリは自らくすぐり地獄に飛び込む決意を決める。

散々死ぬ程くすぐったい思いをする自分を見て、もつと興奮して貰いたくて。現実世界で欲情を叩き付けられたくて、酷いくすぐりを受けるのを承知する。

いたいけな彼女は、事実上最後となるフロアを降りて行く。

だが、ミドリは知らなかった。

ゲームオーバーイベントは、エンジニア部の手により想像を遙かに絶する物へと改良されていることを。

彼女の知らない物へと変貌していることを、ミドリは己の身体で知ることになる。

*
*
*

四階。

.....?

「ひゅひゅつくふひひひひひひひゅつ！　な、なに、なにこれへへへへへへつ」

腹部を中心に苛む止まらなくすぐったさに悶えながら四階に足を踏み入れたミドリはしかし、戸惑いの声を上げていた。

予定では部屋に入った途端触手に襲われてゲームオーバーまでくぐられる筈だった。そうするようにミドリ自身が仕向けた。

しかし。

「この部屋、お、おかしひひひひ……！ あつやだつ！ 腋こちよこちよだめへへへっつ！」

先生からの悪戯に対して敏感に反応しつつ、想定していた物とは違
う光景にミドリは困惑する。

部屋一面がブヨブヨとした触手や物体に覆い尽くされ、所々から何かが噴出している音が響いていた。

紫色の空氣が充満しているこの世界は、ミドリが全く知らない物。
「~~~~~ッ」

不意に紫色の空気を吸った瞬間、身体がビクンと跳ね、身体の奥から染み込んでくるような熱を帯び始めた。

「ひっひっひっひっ!」

シリと生え揃っている。

あれを肌に這わされたら、無慈悲に往復運動をされたら、狂うどころのくすぐったさに見舞われる所の話ではないかもしれない。

「い、いやつつやめつつ!! 来ないでッッ!!」
懇願する。

あれに襲われたくないと。

だが、触手がそんな願いを聞き届ける筈もなく。

プチュッ。と、彼女の柔肌に触手が食らいついた。

「くひやはつつ!!」

ぷちゅつつ、ちゅぷちゅぷつつ!!

「ひひやひつつ! はつつくふあああつつ!!」

ビクビクッ!! と、触手が肢体に口づけをした途端彼女の身体がくすぐったそうに跳ねる。

パチンと弾けるような感覚にミドリは息を詰まらせ悶絶し……。

「んあつつくふあひひひひひつつ! あっあひつつ!!」

ツツ……と、触手がその先端を押し付けたまま身体中を這い回り始めた時、そのくすぐったさは地獄となってミドリの脳内に叩き込まれ始めた。

「ひひやあああああつつ!! あつつあつつ!! ああああああああああつつ!!」

あまりにくすぐったいと、笑う余裕すら生まれないことを、ミドリはたった今思い知らされた。

死んでしまうと錯覚する程くすぐったいの、笑い声が出ない。

ただ、悲鳴を上げることしか出来ない。

「あひひいあああああつつ!! やめつつやあああつつやあああああああああつつつつつつ!!」

チュルチュルと先端に生えた四本の細い触手がミドリの肌をねぶりながら這い回り、そのたまらない刺激にミドリは声を大にして、首をイヤイヤと左右に振り乱しながら悶絶する。

「やめつつくひひあああああつつ! いやっついやつつつ!! やめつつんあああああんつつ!!」

くちゅくちゅ。

ちゆるちゆる、ちゆるちゆるちゆる。

ちゅば……ちゅば……。

「いやっついやいつつひひやはあああつつ! やめてつつうごきまわらないでつつだめへへへへッッ!!」

ちゆるるるるるるるつ。

ちろちろ……かぶ、……ちゅううううううつ。

「やめつつどれもだめえええへへへへっ! いひやつつひあつつあつつくひゅふあああひひひひひつつ! おと、おとたてないでつつやめてへへへへへへへへ」

腋の下を通りすぎる度、

背筋を下から上へとなぞられる度、

お腹で円運動される度、

わき腹に何度も口づけされる度、

足の裏をチロチロと舐め上げられる度、

ミドリはたまらなさそうに、首を左右に振って悶絶する。

「やだっつこれ今までのくすぐりよりもやだああああああっ
っっ！！　っらいよっつっこれっらいいひひひひひひっ！！
た、たすけっつたすけへへへへへへへへっ！！」

舐められる刺激によって全身を苛まれているミドリだが、責めているのは面積の小さい四本の触手だけ。

今まで受けた暴力的なくすぐったさと比較するとその刺激は優しい。だが、それが逆にミドリを追い詰めていた。

「あひひやひああああっ！！　やだっつやめへへへへっ！！　あ
っいっつからだあっいいひひひひひひひひひひっ！！」

肌を舐め回される感覚はくすぐったさと同時に、どうしようもないもどかしさをミドリに与え続ける。

部屋に充満している媚薬成分が多分に含まれている空気を吸い続けているのと、あくまでもくすぐられているのは極一部、時間にして一瞬ずつというのがミドリの吐息を熱くするのに拍車を掛けていた。

「だめっつこれだめっつっおねがだからやめてへへへへっ！！
ひっつひあううああああっ！！　きゃふあっ！！　ふあひっつんっん
あっつくふああああああっ！！」

やがて、くすぐられていた筈なのにミドリの声から笑い声が消える。感じていくくすぐったさは変わらないのに、それ以上に押し寄せる快感に声が流されていく。

そうなればなる程、ミドリにとって地獄を与えていく。

快感を感じ始めているのに、気持ち良い事は何一つされていない。あくまでも、くすぐりたいことしかされていない。

それが何よりも、彼女を辛くさせる。

「はひっつひひやひひっ！！　んっつっあっ！！　だ、め……っ！！
くっつああっ！！　ん、んっつんっつんっ……！！」

ギュっつと、歯を食い縛り快感を必死に抑え込もうとする。

けれども漏れ出してしまう声は多く、むしろ我慢すればする程、体内で気持ち良さが蓄積してしまう。

「う……んっ……！！　く……っくうっつ！！　んくっつ！！　ん
っ！！　はふっつふっつ！！　ふっつ……！！　ふっくっつ！！」

耐える。

耐え続ける。

だが触手の責めが続く限り、下腹部は熱をどんどん帯びて行く。このまま続けて行けば遠くない内に堕ちる。

ミドリ自身、その未来に気付いていたがそれでも懸命に耐え続ける。だが。

「ん……んっつ……んっつ……ん、あっつ……」

触手は、ミドリが屈服するまで待つのが億劫になったようだった。シュル……と、わざとらしく音を立てて新たに表れた二本の触手が、ミドリの小柄な胸の先端目掛けて伸びた後、彼女の前で見せつけるようにゆっくりと鎌首をもたげる。

「ひう……や、だ……それ、やだ……絶対や、だ……っ！！」

グバっつと、これ見よがしに先端を開いた先にあつたのをミドリは目撃し、涙ながらに懇願する。

目撃してしまったのは、ペロ。

まるで歯の無い口に見える内部を見せつけられたミドリは、何度目になるか分からないまま首をイヤイヤと左右に振った。

しかし、触手がそんな儚い願いを聞き届ける訳もなく。

ぱくっつと、触手は容赦なく、彼女の柔らかく小さい胸を頬張った。

「あっつ……！！！！　あっつあっつ……！！」

刹那、激しく甘い声がミドリから走る。

一瞬だけ、時間が空いた後。

やひひひひひ……！
くすぐったいの、にひひひひひ……！」

あまりのくすぐたさにミドリは一切悪く無いのにごめんなさいと謝り始め、触手がわき腹や胸の真横部分をグリグリと先端部分でこねくり回す様に押し付ければ押し付ける程涙を流して悶絶する。

そんな悪循環だった。

[illegible]

全身を苛むくすぐったさだけで、一杯一杯になる。
なのに。

シュリ、シュリ、シュリ、シュリ。

「きひひやはっ!? はっは、あつつあつつああああああああ
あああああああああッッ!」

シュリ、シュリ、シュリシュリシュリシュリ。

[illegible]

ミドリが跨っている触手が、おもむろに前後運動を始めた。

今まで必死に腰を振っていた触手が自ら動き始めたことにより、ミドリにどうしようもない気持ちさが走る。

それは、くすぐりが始まる前までならば簡単に絶頂に辿り着けていたであらう快樂。

だが今は。

どんなに気持ち良くされても、イけない。

気持ち良い感覚はずっと体内に蓄積されていて、今も温度を上げて燃え上がり続けているのに、どういう訳か身体が最高地点に到達したと認識してくれない。

ボロボロと、耐え切れず涙を流す。

涙の意味を自分自身ですら理解出来ぬまま、気持ち良さとくすぐつたさに翻弄され続けて泣き続ける。

そう苦しむミドリの姿は、どこまでも煽情的だった。

[illegible]

これこそが、エンジニア部が仕掛けたゲームオーバーイベント。

快樂による絶頂をシステムによつて封じ込め、青天井に快樂を感じさせる。

その限界を超えて尚止まらない気持ち良さは、同時にくすぐったさの感度も爆発的に引き上げる。

最後の終わりとして、敗者の末路として相応しいイベントとして実装されたそれが、容赦なくミドリに降りかかる。

[illegible]

——現実世界。

手足を拘束していた穴の拘束が緩まった後ガコンと音を立ててヘルメットが外れ、ミドリは現実世界に帰還する。

「せ、せんせ……、は、あ……！　せんせ………」

しかしそれは、彼女に刻まれた焼け付くような火照りが冷めた訳ではなかった。

むしろ、悪化したと言っている。

舌足らずな声で、彼女は先生と呼び掛ける。

その声には、どこまでも煽情的な色気が混じっていた。

「おね、おねがい……しま、あ……。から、だが……。あ、あつ……。あつ……。んです……。！」

寸止めに寸止めされた肢体がヒクヒクと小刻みに痙攣し、熱が欲しいと訴える。

目線を下に落とさなくても分かる。

勃っているし、濡れている。それも、どうしようもないぐらいに。

「そ、そこにベッドがありますから……。おねが」

今まで先生がずっと自分の身体を弄んでいたことは知っている。

だからその続きをしましょうと、こうなれば良いなと思って用意していた簡易ベッドに自分を運んでと、そうお願いするが。

「ごめん……。運ぶのも我慢出来ない」

ガバリと、仰向けに座っているミドリの上に先生は押し掛かった。

今まで見たことの無い先生が見せる『雄』の一面に、またしても身体がキュンと疼く。

ああ、今、自分は襲われている。

それがたまらなく、嬉しい。

「ミドリ」

行動とは裏腹に優しく声が掛けられる。

でも、ミドリはその優しい一面は瀬戸際であることを知っている。先生の目が、今すぐにでも襲いたそうにしているのをこれでもかと語っているからだ。

「普通にすると、くすぐられながらされるの、どっちが良い？」

意地悪な質問だった。

選択肢はもう、決まっていると言うのに。

だからミドリは、頬を上気させて微笑みながら答える。

「くすぐられながら……。お、おねがい……。しま……。ふひやはっつ！」

言い切ることは、出来なかった。

その頃にはもう、先生の手がミドリのお腹に伸びていた。

完全に出来上がったミドリはお腹を撫でられる刺激に一切我慢出来ず可愛らしく悶える。

「せんせ……。せんせへへ……。！　もっと、もっと激し、くふふふ！」

「ダメ。最初はゆっくりと。ね？」

「ふ、あ……。は、い……。は、ひひひひ！」

囁き声が、ミドリの脳を溶かす。

彼女の頭の中は、目の前にいる意中の人のことで頭が一杯だった。

そしてそれは、自分を襲っている意中の人も同じ。

今は、ひたすらに自分が虐められる番。

それが終わったら、今度は自分が楽しませる番だ。

「く、すぐったひひ……。！　もっと、もっと。くすぐふふふった

つい、のっおねがひひ、し、まっつくくく……。くふひひひひっ！」

でも、奉仕するだけの体力は残してくれると嬉しいな。

くねくねと身を振らせ、先生から送られるくすぐったさを愉しみな

がらそんなことを片隅で思う。

「いっぱい我慢したらベッドに行こう。それからいっぱい笑おうね」

145

参加させていただき
ありがとうございました！
獄中で看守達にくすぐりで
いじめられているという
妄想シチュエーションで、
「超人」不知火力ヤさんを
描かせていただきました。
本物の超人ならきっと
くすぐり拷問なんかには
負けないはずですよね😊
再登場待ってます！！！！



あいつがずっと
くすぐったらしく
顔ぐちゃぐちゃにして
謝り始めました(笑)

ぽてお

(X:@potential_otoko)

お読みいただきありがとうございました。
エンジニア部が登壇品にわからされる展覧は
いつか描きたかったのを超満足です!!!

ちなみにこれは制作時の裏話なんですけど
ウケいのお腹、実はちょっと盛られています。
これは、白石ウケいはて女なところがあるので
もしや暁輪大祭の時に1人だけ
応援団服を着ていたのも
だらしない身体だから躊躇したのではないかと
と解釈したためです。

ホントは腋も未処理か!?とか思ったけど
人の本なので自重しています。でも
お腹を盛るのが難しいですね。
※まっとうチア服着ると
こんな感じだと妄想しています→

P.S.

c105では私自身も
錠前サオリ本を出すつもりです。
なのでよければ来てください!



みちのく アイを込めて(黒鉄の魚影と旧エヴァ最高)

イチシキ太郎と申します。
小説部門で参加いたしました。
普段はトリックボイスという
サークルの代表として音声作品
を作ったり、VRChatで遊んだり
しています。

二次創作&百合ものは私の原点
なので、今回は久しぶりに
その形で筆を取りました。

幼馴染の関係が醸し出す空気間
は、何物にも代えがたいと
思います。特に、片方だけが
クソデカ感情を持ってるタイプ
だと尚良しです。

イチシキ太郎

初めまして、キノコアザラシです。
今回はカンナにエロエロな目に遭っていただき
ました。
楽しんでいただけたでしょうか。

もし今回の小説で私の作品に興味を持ってい
ただけましたら、boothやDLsiteでブルアカの
くすぐり小説集を販売しておりますので、
覗いてみて頂けると幸いです。

pixiv ID:2477409



ブルアカはくすぐり拷問シチュが最も熱いジャンルだと思います。C&Cも赤冬保安委員会もくすぐり拷問で要求を吞ませています。なら、当然SRTでも訓練くらいはしますよね？先輩からの洗礼、くすぐりにハマってしまった同僚とのプレイ。そういう歪さがあの特殊部隊にあると良いなって気持ちです。どんどん訓練して、どんどんくすぐりに弱くなってほしい

なな☆だま@nanadama

皆さまはじめまして。そうでない人はお世話になってます。黒羽（くろは）リズです。普段は音声作品を作ったり小説を書いているくすぐりフェチの物書きクリエイターです。音声サークル「トリックボイス」所属です。良かったら作品チェックしてね（ダイマ）。縁あってこの度合同誌に寄稿させていただくことになりました。合同誌に参加するのは密かな夢の一つだったので叶えられて嬉しいです。

自分は普段、所謂F/M（女性が攻めで男性が受け）をメイン小説だったり音声作品を作っている人間なのですが、今回は女の子がくすぐられる話を書けい、とのお達しだったのでセミナーの三人を書かせていただきました。ほのほのとした空気感でありながらも、男子禁制の空間っていうドキドキ感が表現できていたらいいな。

最後に謝辞を。主催のソーダさん、フェムトさん、一緒に参加されたクリエイターの皆さま。そして何よりこの本をお手に取ってくださった方、本当に本当にありがとうございます。素敵なクリエイター様方の作品が勢揃いの本品、是非骨の髄までご堪能して皆様にとっての”青い記録”にしてくださいませ。おっと、最後に物書きらしくうまいこと言えたんじゃないか？

かむらケイと申します。

今回のコミケではブルアカ合同誌という形で参加させていただきました。私自身サークル側での参加は初めてであり、良い経験となりました。自分の性癖を詰め込んで描いたので楽しんで貰えたら幸いです。

また今回の企画者であるソーダ様についてはこういった機会を与えていただき感謝申し上げます。ありがとうございました。



かむらケイ。

X(IHTwitter):かむらケイ@kamuratick

キリノに黒ブラ着せたい気持ち
だったので着せましたが、今見
返したら「キリノは白に決まっ
てんだろ…」ってキレそうにな
りました。でも当時の自分が黒
にしたかった気持ちを信じて脱
稿します。ついでにちょっと盛
ります。
ゆるして。



さなだめ

あとがき

メロウパンです。
最初はセリナとハナエのマッサージ
ものを書こうとしたのですが、機械
姦っぽいものに挑戦したくなってヒ
フミに犠牲になってもらいました。
彼女ほど導入が書きやすいキャラ
もそうそういないですし、一番の難
所を突破させてくれました。もっと
書きたかったことや、アズサも巻き
込まれるシーンとかも書きたかった
のですが、それはまたの機会に。
初めての合同誌参加でしたが、
気持ちよく作品を書かせてくだ
さったソーダさん、ありがとうございました！

理不尽系のギミックに
なす術なくやられる
真面目な子……って
シチュエーションは
良いよねって気持ちと
体操服マリーちゃん
欲しいなって気持ちで
描きました！



ちゅーさ

(X ID: @syunktyusa)

主催者に土下座して納期を伸ばして
もらい、なんとか納品いたしました。
何年かぶりの創作でしたが、書いてる
ときはとても楽しかったです。
これを機にまたどこかで創作を
したいと思った所存です。
サラッと読めるような文章を
心がけて書きましたので
おつまみ感覚で読んでいただけたら
幸いです。

p.s. ムツキを書きましたが、便利屋の推しはハルカです。
そして最推しはカリンです。

しょっく

杏山カズサは
先生^タに対する^チ攻めと
アイリ^ネに対する^コ受け
両方の性質を併せ持つ♡



黒蜜きなこ餅

あとの がきじゃあ



この度は合同誌をお手に取って
いただきありがとうございました
誰かの癖に刺されば幸いです。

ページとか時間とか、いろいろな制約で
結構端折った展開になってしまいましたが
ホントはもっとコユキがぐしゃぐしゃに
なっていく様を描きたかったですね…
たぶん次もブルアカ描くと思うので
そのへんでリベンジしたいです。

p.s.
コユキって自分の身だしなみに
無頓着な気がするんですけど
あのなが〜い髪って誰かが
手入れしたりしてるんですかね？
たまにユウカ&ノアで面倒
見てたりしたら幸せですね。
ね、ハム太郎。



あとがき



このたびは『ブルアカくすぐり合同』を
手に取っていただき、ありがとうございます。
この本が皆さまのくすぐりライフを少しでも
彩ることができたら、ソレに勝る喜びはありません。

今回はとんでもない極道入稿スケジュールに
なってしまい、主催のソーダ様に変なご迷惑
をおかけしました。
次回があれば、もっと余裕を持ったスケジュー
ルで動きたいですね……。
うれあっぷに代わりお詫び申し上げます。
ちなみに、この文章を書いているのは作者のう
れあっぷの都合のいい友人のハムマリです。
彼にはあとで私からきつく言っておきますので
皆さまお許しください……。

うれあっぷ

女先生に好かれまくるケイのつもりが、
エンジニア部製の椅子に捕まってる
ケイになってました。
なんなら絵にするつもりがすっかり
描き方忘れて文字になってました。
なにはともあれ誰かに刺されば幸いです。
じゃあケイちゃん、次はシャーレで
女先生といちゃいちゃしようっか。



フェルト

あとがき

才羽ミドリ！！ 君が一番えっちだ！！！！

と言う純粋な想いから、書かせて頂きました。
得意分野であるエロトラップダンジョンを題材に一途なミドリのお話を書けたと思っております。
何故なくすぐりはキヴォトスではえっちなことですからね。

改めまして、主催のソーダと申します。
このたびはブルアカくすぐり合同を手にとって頂きまことにありがとうございます。

なんと私を含めて十七名の参加ですよ。凄すぎますね。
この本は皆さまの助力無しには完成してませんでした。
何度も何度も頭を下げています。本当にありがとうございました。

コミケに初出展、加えて初合同誌ということで、この本を製作するにあたり色々な方から助力を頂き、どうにか完成まで漕ぎ付けました。誰かに頼ることは恥ずかしいことではない、これは覚えておきましょう。私は改めて思い知らされました。

とはいえ自分の中で改善点が多々見つけてしまっているのも事実であり、もし次回があるならば、改善していきたいなと思います。あたふたしている間に時間が無くなってしまったんです許して下さい！！

次回は誰かの合同に寄稿するのか自分で企画するのかは未定ですが。
書くならモイモイかヒナかの二択じゃないかなとぼんやり思考中です。

それでは、最後になりますが改めまして参加して下さいました皆様。
この本を購入して下さいました皆様。心より感謝申し上げます。

この本が、皆様にとって宝になりますように。

ソーダ

奥付

誌名 : 先生！ キヴォトスではくすぐりはえっちなことなんだよ！
発行日 : 2024年8月11日
コミックマーケットC104
発行者 : ソーダ
サークル : スプライター
E-mail : 0558tansan@gmail.com
PIXIV : @sooda055
X(Twitter) : @sooda055
印刷 : サンライズパブリケーション株式会社

- ①本書の無断転載、転売、その他違法行為にあたる利用はご遠慮下さい。
- ②本書は非公式の二次創作です。原作との関係はございません。

